

## モンゴル語の使役文の意味の違いについて\*

橋本 邦彦

# The Different Meanings of Causative Sentences in Mongolian

Kunihiko HASHIMOTO

**Abstract:** The purpose of this article is to explicate some factors producing three meanings of causative sentences in Mongolian. The causative verbs are formed by adding the causative suffixes, *-aa<sup>4</sup>-*, *-ga<sup>4</sup>-*, *-lga<sup>4</sup>-* and *-uul<sup>2</sup>-*, to intransitive or transitive stems. The causative sentences including these verbs have the three meanings, *~suru* type, *~saseru* type and *~sitemorau* type in them, but the differences cannot be understood only in terms of their construction forms. In order to solve this difficult problem, we will use seven parameters in form and meaning to reveal how the three different meanings are generated in the causative sentences.

**Keywords:** causative, meaning, difference, parameter, Mongolian

### 1. はじめに

ある行為や事態、状況が何らかの原因により引き起こされる様を表す言語上の手段の一つに、使役文(causative sentences)がある。モンゴル語（ハルハ方言、Khalkha dialect）では、動詞語幹に4つの使役形接尾辞が付加して派生する使役動詞を述語として形成される。使役動詞の派生過程は、次の通りである#1。

(1-1) a. *-aa<sup>4</sup>-*: xat- 「乾く」 + *-aa-* = xataa- 「乾かす」

sön- 「滅びる」 + *-öö-* = sönöö- 「滅ぼす」

b. *-ga<sup>4</sup>-*: nis- 「飛ぶ」 + *-ge-* = nisge- 「飛ばす」

bos- 「起きる」 + *-go-* = bosgo- 「起こす」

c. *-lga<sup>4</sup>-*: suu- 「すわる」 + *-lga-* = suulga- 「すわらせる」

güj- 「走る」 + *-lge-* = güjlge- 「走らせる」

d. *-uul<sup>2</sup>-*: damž- 「伝わる」 + *-uul-* = damžuul- 「伝える」

deešl- 「良くなる」 + *-üül-* = deešlüül- 「改善する」

どの使役形接尾辞も生産的であり、語幹が短母音で終わるか長母音で終わるか、自動詞か他動詞か等の選択要因が関与すると考えられるが、本稿では直接論旨と関わらないので割愛する。

最初に、モンゴル語の典型的な使役文の例を見てみよう。

(1-2) a. **Bi**            **ter xüüxd-ijg**    **bos-go-son.**

1SG:NOM that child-ACC rise-CST-PF #2

(私はその子を起こしました。) <AD> #3

b. **Bagš**            **nadad**    **ter nom-ijg**    **unš-uul-a-v.**

teacher:NOM 1SG:DAT that book-ACC read-CST-EP-PST

(先生は私にその本を読ませました。) <AD>

(1-2a, b)から、使役文の形態・統語上の特徴を3つ指摘できる。第1の特徴は、文法役割としての主語が2つあるということである。(1-2a)の主格形代名詞 *bi*、及び(1-2b)の主格形名詞 *bagš* が、それぞれ、使役性を発動する主語の役割を演じている。一方、動詞語幹の示す行為を行う主語として、(1-2a)では対格形名詞句の *ter xüüxd-ijg* が、(1-2b)では与格形代名詞 *nadad* が現れている。主格形主語は対格形主語もしくは与格形主語にある種の行為や事態を行わせる働きかけもしくは操作をするので、「使役主語」と呼ばれる。他方、対格形や与格形の主語はその働きかけを受ける側にあるので、「使役補語」と名付けられる。

使役文の第2の特徴は、使役化を示す形態上の標識の存在である。(1-1a, b, c, d)で記したように、使役形接尾辞が使役化を表示した上で、テンスやアスペクトを表す接尾辞が後続する。(1-2a)では使役形接尾辞 *-go-* に完了形接尾辞 *-son* が、(1-2b)では *-uul-* の後に過去形接尾辞 *-v* が続いている。

使役文の第3の特徴は、使役化される前の基底文が、自動詞文でも他動詞文でもどちらでも構わないということである。(1-2a, b)の基底文は、各々、(1-3a, b)になる。

(1-3) a. **Ter xüüxed**    **bos-son.**

that child:NOM get up-PF

(その子は起きました。)

b. **Bi**            **ter nom-ijg**    **unš-a-v.**

1SG:NOM that book-ACC read-EP-PST

(私はその本を読みました。)

(1-3a)は自動詞文、(1-3b)は他動詞文である。

従来、使役文は、使役補語の格形と項(argument)の数という、形態・統語的な側面から考察されてきた。Comrie (1976: 263)は使役文を、(1-3a, b)の基底文を埋め込んだ統語構造と捉えて、「埋め込み文のS (すなわち使役補語) の表層の実現形は、埋め込み文の動詞 (すなわ

ち自動詞か他動詞)の統語上の項に依存する#4」と述べている。Hammar (1983: 36)はこの考え方に沿って、モンゴル語の使役動詞語幹と使役補語の格形は、次の原則に従うと主張する。

- (1-4) a. 使役動詞が自動詞に基づいて形成される場合、自動詞の行為主である使役補語は対格形をとる。  
b. 使役動詞が他動詞に基づいて形成される場合、他動詞の行為主である使役補語は具格形か与格形をとる。

この原則に沿うと、(1-3a)の基底文の主語は主格形であり、動詞は自動詞である。この文が使役化する過程で新たに使役主語が主格形で登場するので、元の主格形主語は対格形の使役補語と交替し(1-2a)の使役文が派生する。一方、(1-3b)の基底文の動詞は他動詞であり、すでに直接目的語が対格形を取っている。そこで使役化する際に、元の主格形主語は使役補語に交替するのにまだ使われていない与格形を選び(1-2b)が派生する。(1-3a)から(1-2a)への派生に伴い、項は1つから2つに、(1-3b)から(1-2b)では2つから3つに、それぞれ増えている。使役文は使役化の過程で、項の数を1つずつ増やすという統語上の方略を發揮するのである。

Janhunen (2012: 249)によれば、モンゴル語の使役文では最大4つの項まで許される。

(1-5) a. **Miniĵ najz bagš-i-d zaxia bič-sen.**

1SG:GEN friend:NOM teacher-EP-DAT letter:PC write-PF

(私の友人は先生に手紙を書きました。)

b. **Bi najz-aar-aa bagš-i-d zaxia bič-üül-sen.**

1SG:NOM friend-INS-REF teacher-EP-DAT letter:PC write-CST-PF

(私は自分の友人に先生宛てに手紙を書かせました。)

<Janhunen 2012: 249>

(1-5a)は使役化前の基底文であるが、動詞 bič-「書く」は、与格形の間接目的語と欠如格形の直接目的語を有する二重目的語他動詞(ditransitive verb)である。使役化により主格形の使役主語が導入されると、(1-5a)の主格形主語は、すでに用いられている与格形、欠如格形以外の格形、すなわち具格形をとって使役補語と交替する。項の数は、(1-5a)の3つから(1-5b)で4つになるわけである。

以上からわかるように、使役主語から使役補語への格形の交替と項の数の付加とは連動している。(1-2a, b)、(1-3a, b)及び(1-5a, b)から、格形の交替に関して、次のような利用可能性の階層(Hierarchy of Accessibility for Case Forms)を設定することができる。

(1-6) 格形の利用可能性の階層：

使役補語の格形は、次の階層の順序に沿って、まだ利用されていない最も左側の位置にある格形へと左から右へ順次移行していく。

主格形(Nominative) > 対格形(Accusative)/再帰所有形(Reflexive-Possessive)  
/欠如格形(Privative Case) > 与格形(Dative) > 具格形(Instrumental)<sup>#5</sup>

使役動詞の語幹が自動詞か他動詞かの区別、項の付加および格形の利用可能性の階層という形態・統語的な手立てを用いれば、モンゴル語の使役文は余す所なく説明できるように思われる。ところが、実際のデータを子細に観察すると、少なくとも2つの看過できない問題があることに気づくのである。

第1の問題は、使役補語の格形に関わるものである。

(1-7) a. **Bagš**            *nadad*        **nom**        **unš-uul-a-v.**

teacher:NOM 1SG:DAT book:PC read-CST-EP-PST

(先生は私に本を読ませました。) <AD>

b. **Bagš**            *ojuutn-aar*    **nom**        **unš-uul-ž**        **baj-na.**

teacher:NOM student-INS book:PC read-CST-ICC be-PRS

(先生は学生に本を読ませています。) <AD>

(1-7a, b)は共に他動詞 unš-「読む」を語幹とする使役動詞 unš-uul-を持つ使役文である。ところが、(1-7a)の使役補語が与格形なのに対し、(1-7b)では具格形を取っている。

両者の使役文の間に有意な相違のないことは、基底文を較べれば一目瞭然である。

(1-8) a. **Bi**            **nom**        **unš-a-v.**

1SG:NOM book:PC read-EP-PST

(私は本を読みました。)

b. **Ojuutan**        **nom**        **unš-i-ž**        **baj-na.**

student:NOM book:PC read-EP-ICC be-PRS

(学生は本を読んでいます。)

なぜ、同じ使役の意味を表すのに、(1-7a)では与格形をとるのに対して、(1-7b)では具格形をとるのだろうか。

従来、使役補語のコントロール能力(controllability)の有無が、使役文の動詞や使役補語の格形の選択に影響を与えるという説明がなされてきた。Rice (2000: 216)によれば、使役補語にコントロールする能力がない場合、英語の“make”使役読み、すなわち使役主語から使役補語への強制使役の解釈が可能である。それに対して、使役補語がコントロールする能力を有する場合、英語の“make”読みか“let”読み、すなわち後者であれば使役主語から使役補語への勧奨使役の解釈が可能になる。Janhunen (2012: 249)は、この考え方に沿って、モンゴル語の使役文においては「行為のコントロールの度合いが低く、偶発的(accidental)でさえあるような場合は与格形」を、「行為が使役者(本稿での使役主語)によりきっちりコントロー

ルされる場合は具格形」を選択すると主張する。同様に、山越 (2012: 257)は、「Xの(行為者 A に行為を実現させようとする)働きかけが弱い場合に与位格」を、「よりその働きかけが強い場合に道具格」を要求すると述べている#6。

しかしながら、コントロール能力、あるいは働きかけの強弱が、格選択の積極的な要因として関与する事実は、(1-7a, b)からは、はっきりと確認できない。

第2の問題は、モンゴル語の使役文の表す異なる意味の存在である。

(1-9) a. **Bi**            **ter**        **mal-ijg**        **usn-ij**        **tungalag,**    **övsn-ij**  
1SG:NOM    that        cattle-ACC    water-GEN    clear        grass-GEN  
**sermüün-d**            **idešl-üül-lee.**  
fresh pastures-LOC    feed-CST-RPST

(私はその家畜に、水のきれいで草の新鮮な草原で、食べさせました。) <AD>

b. **Bid**            **amralt-ijn**        **ödr-ijg**        **sajxan**        **öngör-üül-lee.**  
1PL:NOM    holiday-GEN    day-ACC    happily    pass-CST-RPST

(私たちは休日を楽しく過ごしました。) <M: 187>

c. **Bid**            **Xarxorin**        **ruu**        **nisex bilet-ee**        **bürtg-üül-sen.**  
1PL:NOM    Kharkhorin    DRC    flight ticket-REF    book-CST-PF

(私たちはカラコルムへの航空券を予約してもらいました。) <AD>

d. **Bi**            **am'tan xün-d**        **güžird-üül-sen.**  
1SG:NOM    other people-DAT    slander-CST-PF

(私は他の人たちに悪口を言われました。) <AD>

(1-9a, b, c, d)はすべて、動詞語幹に使役形接尾辞-üül-の付加した使役動詞から成る使役文である。ところが、各文の意味は、(1-9a)が「させる」型、(1-9b)が「する」型、(1-9c)が「してもらおう」型、(1-9d)が「される」型と、異なる意味を担っている。一見、同じ形態・統語構造でありながら、なぜ4通りの意味が生ずるのだろうか。

これまでの研究、例えば、塩谷(2007)、山越(2012)、Janhunen(2012)では、使役文の意味の多様性については言及しているものの、その理由、あるいは要因は、「文脈から判断する」(山越 2012: 259)ということに済ませ、根本的な解明に向かうことはしていない#7。これは、従来の使役文へのアプローチがあまりに形態・統語的な面に偏り過ぎてきた結果であるように思われる。

本稿では、形態・統語的側面を射程に入れながらも、それに加えて、使役主語と使役補語の意味役割や意味特性、動詞の他動性と意味タイプといった、意味の側面をも考察の対象に含めたい。以下で扱う使役文の意味は、「させる」型、「する」型、「してもらおう」型の3つとする。受身の意味の「される」型は、受身形接尾辞を含む受身文との比較の視点から、稿を改めて詳細に論じることにする。

本稿の構成は、次の通りである。第2節では、他動詞文的な「する」型の使役文について

考察する。第3節では、プロトタイプの「させる」型の使役文を、第4節では受益的意味の「してもらう」型の使役文について考究していく。第5節の結論では、3つの異なる意味を生み出す要因を明らかにする。

## 2. 「する」型使役文

### 2.1 モンゴル語の他動詞文

「する」型使役文は、他動詞文と並行した特徴を有しているように思われる。その事実を検証する前に、他動詞文に特有の特徴を確認しておこう。

モンゴル語の他動詞文の基本的な形態・統語構造は、(2-1)である。

(2-1) [S: NOM] + [DO: ACC/REF/PC] + [V: TRAN]

主語 S が主格形なのに対し、直接目的語 DO は、指示的な場合に対格形 ACC か再帰所有形 REF、非指示的な場合に顕在的な格形の現れない欠如格形 PC を取る。

他動詞文の意味表示を、項(argument)に付与される意味役割(semantic role)を用いて記すと、(2-2)のようになる<sup>#8</sup>。

(2-2) [S: AGENT] + [DO: PATIENT] + [V: ACTION]

主語は行為を開始し、その行為を直接目的語に行使するので、行為主(AGENT, AGT と略記)の意味役割を担う。一方、直接目的語は何らかの行為を被るので、被態主(PATIENT, PAT と略記)の意味役割が付与される。両者は行為動詞を介して意味関係を成立させる。(2-1)と(2-2)を踏まえて、実例を見ていこう。

- (2-3) a. **Alčīn Bat öngörsön žil zuu-g-aad tarvaga al-žee.**  
 hunter Bat:NOM last year hundred-EP-about marmot:PC kill-PPST  
 (獵師のバトは、昨年、約 100 匹のタルバガンを仕留めました。) <AD>
- b. **Bat tüüniḡ ger-t ačaa-g n' xürg-sen.**  
 Bat:NOM 3SG:GEN house-LOC load-ACC 3PCL deliver-PF  
 (バトは彼女の家に荷物を届けました。) <AD>
- c. **Bat ünen xel-ž baj-na.**  
 Bat:NOM truth:PC say-ICC be-PRS  
 (バトは真実を語っています。) <AD>

他動詞文は、動詞の意味を媒介にしての主語から直接目的語に及ぶ行為連鎖(action chain)として捉えることができる(Langacker 1991, Talmy 2000)。(2-3a, b, c)の行為連鎖を図示すると、各々、(2-4a, b, c)のようになる。

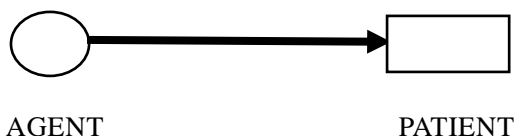
(2-4) a. (2-3a)の行為連鎖 :



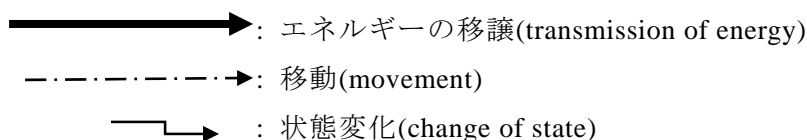
b. (2-3b)の行為連鎖 :



c. (2-3c)の行為連鎖 :



※記号の表示 :



(2-4a)では行為主からの行為を受けて被態主の内部で状態変化が生じるのに対し、(2-4b)では被態主自体の物理的な移動にとどまっている。(2-4c)では状態変化は見られず、被態主は言述行為が向かう話題主((Theme)の役割しか演じていない。

以上、受影性(Affectedness)に関して強弱はあるものの、行為主から被態主への行為の伝達は、他動詞文の他動性を示す重要な要素なのである。

## 2.2 「する」型使役文

### 2.2.1 使役動詞の形成と語幹動詞の意味タイプ

使役動詞は、動詞を語幹として、次の4つの使役形接尾辞が付加することにより形成される。

(2-5) STEM[**VERB**] + CAUSATIVE SUFFIX[-aa<sup>4</sup>-/-ga<sup>4</sup>-/lga<sup>4</sup>-/-uul<sup>2</sup>-] ⇒ [**CAUSATIVE VERB**]

使役動詞を形成し得る語幹動詞を意味のタイプから分類すると、次のようになる<sup>#9</sup>。

(2-6) 意味タイプによる動詞の分類(Classification Based on Semantic Types) :

#### A. 行為動詞(Action Verbs) :

意図的/意志的な、あるいは言語を伴う、動作や行為を表す動詞。

e.g. aʒillax 「働く」、alxax 「歩く」、toglox 「遊ぶ」、selex 「泳ぐ」、javax 「行く」、ineex 「笑う」、ujlax 「泣く」、xaʒigirax 「叫ぶ」、jarix 「話す」、xelex 「言う」、zövšööröx 「同意する」<sup>#10</sup>、etc.

B. 活動動詞(Activity Verbs) :

知覚、認識、感情、生理現象などの、身体的、心理的、あるいは知性的に働く活動を表す。

e.g. xarax 「見る」、sonsox 「聞く」、bodox 「思う」、itgex 「信じる」、ažiglax 「観察する」、xajrlax 「愛する」、uurlax 「怒る」、gajx 「驚く」、untax 「眠る」、böölžix 「吐く」、najtaax 「くしゃみする」、etc.

C. 自発動詞(Spontaneity Verbs)<sup>#11</sup> :

非意図的/非意志的で、自然発生的に、あるいは内在的な働きにより生じる事態を表す動詞。

e.g. garax 「起こる」、unax 「落ちる」、evdrex 「こわれる」、živex 「沈む」、gjalalzax 「光る」、xajlax 「溶ける」、murujx 「曲がる」、ongojx 「開く」、xaax 「閉じる」、bijelax 「実行される」、šalgaaarax 「選ばれる」、töxöx 「生まれる」、etc.

D. 状態動詞(State Verbs) :

可変的な状態、継続的な状態、あるいは恒常的な状態を表す動詞。

e.g. bajx 「ある、いる」、bajrlax 「(場所を) 占める」、zoxix 「適する」、suux 「とどまる」、taarax 「一致する」、üldex 「残る」、ürgelžlex 「続く」、etc.

2.2.2 自発動詞を語幹とする使役文

次の4つの使役文を見てみよう。

(2-7) a. **Malčid                    zun                    övs                    xat-aa-dag.**

herders:NOM    summer    grass:PC    dry-CST-HBT

(牧人たちは夏に草を干します。) <AD>

b. **Bi                    xüüxd-üüd-ee                    Švejcar'-d                    ös-gö-sön.**

1SG:NOM    child-PL-REF    Switzerland-LOC    grow-CST-PF

(私は自分の子供たちをスイスで育てました。) <M: 122>

c. **Bi                    conc                    ongoj-lgo-čix-son.**

1SG:NOM    window:PC    open-CST-CMP-PF

(私は窓を開けてしまいました。) <M: 138>

d. **Colmon                    n'                    žoloo-g-oo                    sulr-uul-san.**

Colmon:NOM    3PCL    rein-EP-REF    get loose-CST-PF

(ツォルモンは自分の手綱をゆるめました。) <MX5: 17>

(2-7a)では使役形接尾辞-aa<sup>4</sup>-が、(2-7b)では-ga<sup>4</sup>-が、(2-7c)では-lga<sup>4</sup>-が、(2-7d)では-uul<sup>2</sup>-が、それぞれ、語幹動詞に付加して使役動詞を形成している。

4つの文は、形態・統語的には使役文であるが、行為連鎖的には(2-4a, b, c)で図示した他動詞文と同じであるように見える。使役主語は実質的に行為主として使役補語である直接目的語に行為の働きかけをする。当の目的語は被態主としてその行為の影響



を被るだけで、プロトタイプの使役文で期待されるような自らも二次的な行為主 (Secondary Agent) として振る舞うことはない。それは、使役補語の意味特性がすべて [+/- animate, -instigating, -controllable] であり<sup>#12</sup>、自ら行為を引き起こしたり、エネルギーを出すことのできない事実から見て取ることができる。

(2-7a, b, c, d)の基底文は、各々、(2-8a, b, c, d)に対応する。

(2-8) a. **Övs**            **xat-san.**

grass:NOM dry-PF

(草が乾きました。)

b. **Minij**        **xüüxd-üüd**        **Švejcar'-d**        **ös-sön.**

1SG:GEN child-PL:NOM Switzerland-LOC grow up-PF

(私の子供たちはスイスで育ちました。)

c. **Ene conx**            **ongoj-čix-son.**

this window:NOM open-CMP-PF

(この窓は開いてしまいました。)

d. **Žoloo**        **n'**        **sulr-a-san.**

rein:NOM 3PCL get loose-EP-PF

(その手綱はゆるみました。)

(2-8a, b, c, d)はすべて自動詞文であり、動詞の意味タイプは(2-6C)の自発である。自発動詞の語幹と使役形接尾辞が結び付くことで、xataax「乾かす、干す」、ösgöx「育てる」、ongojlgox「開ける」、sulruulax「ゆるめる」という行為の意味タイプの他動詞を派生させるのである。いわば、動詞の意味のタイプが、使役形接尾辞を付加することで、自発から行為へ移行するのである。

自発動詞を述語とする文では、主語の意味役割は被態主になる。(2-8a, b, c, d)の基底文を使役化し、(2-7a, b, c, d)を生成する際に、主語は被態主の意味役割を保持したまま、使役文の使役補語の位置に立つ直接目的語へと交替するのである。

(2-9) a. 基底文 : [S: NOM: PAT] + [V: INTRAN: SPONTANEITY]

b. 使役文 : [CAUS-S: NOM: AGT] + [CAUS-C=DO: ACC/REF/PC: PAT] + [CAUS-V: TRAN: ACTION]

他動詞的な使役動詞を形成する自発タイプ自動詞には、他に次のようなものがある。

(2-10) a. -aa<sup>4</sup>-と結合 :

asax 「火がつく」; бүтөх 「実現される」; зогсох 「止まる」; өдөх 「始まる」; сөнөх 「なくなる」; untrax 「消える」; xalax 「暖かくなる」 etc.

b. -ga<sup>4</sup>-と結合 :

duusax 「終わる」; өсөх 「成長する」; ursax 「流れる」; xijsex 「吹き飛ばす」 etc.

c. -lga<sup>4</sup>-と結合 :

arilax 「きれいになる」; salax 「分離する」; serex 「目覚める」 etc.

d. -uul<sup>2</sup>-と結合 :

deešlex 「上がる」; зorigzix 「勇気がわく」; nemgdex 「増える」; sajžrax 「よくなる」; төрөх 「生まれる」 etc.

2.2.3 状態動詞を語幹とする使役動詞

次の3つの使役文を観察してみよう。

(2-11) a. **Bat xooln-ij-xoo cöoxönx-ijg ööröö id-eed**

Bat:NOM meal-GEN-REF the less part-ACC self-REF eat-PCC

**ixenx-ijg dүү-d-ee үлд-ee-v.**

the greater part-ACC younger brother-DAT-REF remain-CST-PST

(バトは自分の食事からほんのわずかを食べてから、その大半を自分の弟に残しました。) <AD>

b. **Bid gol gudamž-ijg baj-g-uul-ž duus-laa.**

1PL:NOM main street-ACC be-EP-CST-ICC finish-RPST

(私たちはメインストリートを建設し終わりました。) <AD>

c. **Malčid övöl, xavar, zun, namr-ijn uliral-d**

herdsman:NOM winter spring summer autumn-GEN season-LOC

**mal-ijn-xaa us belčeer-ijg toxir-uul-na.**

cattle-GEN-REF water pasture-ACC be suitable-CST-PRS

(牧民たちは、冬、春、夏、秋の季節に自分たちの家畜の水や放牧地を調整します。) <U: 44>

(2-11a, b, c)はすべて(2-6D)の状態の意味タイプに属する動詞を語幹として、-aa<sup>4</sup>-と-uul<sup>2</sup>-の使役形接尾辞が後続している。対応する基底文は、(2-12a, b, c)に見るように、状態を表す自動詞文である#13。

(2-12) a. **Ixenx n' end üld-e-ž baj-na.**

the greater part:NOM 3PCL here remain-ICC be-PRS

(大半のものがここに残っています。)

b. **Ter gol gudaṁž xot-ijn töv-d baj-dag.**

that main street:NOM city-GEN center-LOC be-HBT

(そのメインストリートは町の中心にあります。)

c. **Ene nutg-ijn us belčeer mal-d maan'**

this homeland-GEN water pasture:NOM cattle-LOC 1PLPCL

**toxir-no.**

be suitable-PRS

(この居住地の水と放牧地は私たちの家畜に適しています。)

(2-12a)の *üldex*「残る」から(2-11a)の *üldeex*「残す」が、(2-12b)の *bajx*「ある」から(2-11b)の *bajguulax*「建設する」が、(2-12c)の *toxirox*「合う」から(2-11c)の *toxiruulax*「調整する」が、それぞれ、形成されている。状態動詞が使役化することで行為動詞に転ずるというわけである。行為動詞を述語とする使役文は、2.2.2 節の自発タイプの語幹動詞の場合と同様に、意味的には他動詞文と言える。

(2-13) a. 基底文 : [S: NOM: TH] + [V: INTRAN: STATE]

b. 使役文 : [CAUS-S: NOM: AGT] + [CAUS-C=DO: ACC/REF/PC: PAT] +  
[CAUS-V: TRAN: ACTION]

基底文では、主格形主語の意味役割は、行為を発動することも被ることもしない話題主であり、動詞は状態自動詞である。これが使役化するのに伴い、使役主語として主格形の行為主が加わり、元の主語は使役補語の位置を占める対格形直接目的語と、状態自動詞は行為他動詞と交替する。なお、直接目的語の意味特性は、[-animate, -instigating, -controllable]であり、プロトタイプの使役補語に期待されるような自ら行為する能力は備わっていない。

#### 2.2.4 行為動詞を語幹とする使役動詞

行為の意味タイプ(2-6A)に属する動詞に使役形接尾辞が付加する例が、若干見出せる。

(2-14) a. **Ted ter noosn-ij zarim-ijg gadaad-a-d gar-ga-na.**

3PL:NOM that wool-GEN half-ACC foreign-EP-LOC go out-CST-PRS

(彼らはその羊毛の半分を外国に輸出します。/\*彼らはその羊毛の半分を外国に出させます。) <AD>

b. **Ter minij ax-a-d nom-oo jav-uul-san.**

3SG:NOM 1SG:GEN elder brother-EP-LOC book-REF go-CST-PF

(彼女は私の兄の所に自分の本を送りました。/\*彼女は私の兄の所に自分の本を行かせました。) <AD>

(2-14a, b)では、行為タイプの自動詞語幹に使役形接尾辞が付加している。その意味は、語幹動詞の意味に使役の意味を加えたものではなく、「輸出する」、「送る」のように、特有の意味を持つ語彙化された他動詞になっている。この事実は、語幹動詞を述語とする基底文の不適合性から確認できる。

- (2-15) a. \***Ter noosn-ij zarim n' gadaad-a-d gar-na.**  
 that wool-GEN half:NOM 3PCL foreign-EP-LOC go out-PRS  
 (その羊毛の半分は外国に出ます。)
- b. \***Tüünij nom minij ax-a-d jav-san.**  
 3SG:GEN book:NOM 1SG:GEN elder brother-EP-LOC go-PF  
 (彼女の本は兄の所に行きました。)

(2-15a, b)は行為動詞述語の自動詞文であるから、主語は自ら行為をするか、少なくともエネルギーを発揮する実体でなければならない。ところが、(2-15a)の主語は noos 「羊毛」であり、(2-15b)の主語は nom 「本」であるため、動詞に示された行為を自ら行うことができず、不適合な文と判定される。(2-15a, b)は、各々、(2-14a, b)の基底文とはなり得ないので、使役文は派生の結果ではなく、語彙化された他動詞を含む文と考えざるを得ないのである。

因みに、(2-15a, b)の主語を行為主の意味役割を担う名詞句に換えると、(2-16a, b)のように適合文となる。

- (2-16) a. **Ter ažilčin gadaad-a-d gar-na.**  
 that worker:NOM foreign-EP-LOC go out-PRS  
 (その労働者は外国に出ます。) <AD>
- b. **Tüünij najz minij ax-a-d jav-san.**  
 3SG:GEN friend:NOM 1SG:GEN elder brother-EP-LOC go-PF  
 (彼女の友人は私の兄の所に行きました。) <AD>

これらの文を使役化すると、(2-17a, b)のような文が派生する。

- (2-17) a. **Ted ter ažilčin-ijg gadaad-a-d gar-ga-san.**  
 3PL:NOM that worker-ACC foreign-EP-LOC go out-CST-PF  
 (彼らはその労働者を外国に出発させました。/\*彼らはその労働者を外国に輸出しました。)
- b. **Ter naiz-aa minij ax-a-d jav-uul-san.**  
 3SG:NOM friend-REF 1SG:GEN elder brother-EP-LOC go-CST-PF  
 (彼女は自分の友人を私の兄の所に行かせました。/\*彼女は自分の友人を

私の兄の所に送りました。)

(2-17a, b)は(2-14a, b)とは異なり、プロトタイプの「させる」型の意味を表すが、語彙化された他動詞の意味は持っていない。

以上から、使役動詞の語幹が *garax* や *javax* 等の限られた行為タイプ動詞であり、直接目的語が[-animate, -instigating, -controllable]の意味特性を有する場合、使役形接尾辞が付加しても、プロトタイプの「させる」型使役文とはならず、独自の意味を示す語彙化された行為他動詞を派生させるのである<sup>#14</sup>。

## 2.3 結び

「する」型の行為を表す使役文には、次のような特徴のあることがわかった。

(2-18) A. 語幹動詞は、一般に、自動詞である。若干の語彙化された使役動詞で他動詞である場合がある。

B. 使役主語の格形は主格形である。使役補語は実質的には直接目的語で、対格形/再帰所有形/欠如形の格形をとり、構文は他動詞文として機能する。

C. 語幹動詞の意味タイプは、自発か状態である。ただし、若干の語彙化された動詞では、行為の意味タイプとなる。

D. 動詞の意味タイプの移行を表す階層は、行為≪自発/状態である。

自発、あるいは状態の動詞語幹に使役形接尾辞が付加することで、1 つ左の行為へと意味タイプが移行する。

E. 使役主語の意味役割は行為主、使役補語＝直接目的語は被態主である。

F. 使役補語＝直接目的語の意味特性は[-animate, -instigating, -controllable]である。

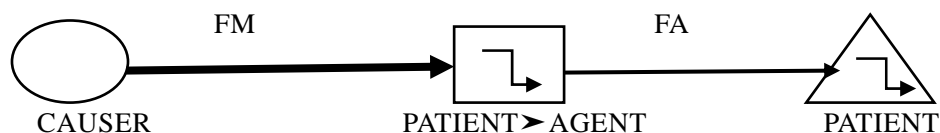
G. 使役主語は原動主(CAUSER)であると同時に行為主でもあるから、使役補語＝直接目的語に働きかける力、すなわち操作力(Force of Manipulation, FM)は強い。一方、使役補語は直接目的語として専ら操作力を受けるだけなので、自ら行為する力、すなわち行為力(Force of Action, FA)は弱い。

## 3. 「させる」型使役文

### 3.1 使役補語の格形から見た分類

「させる」型はプロトタイプの使役文であり、次のような行為連鎖を見せると考えられる。

(3-1) プロトタイプ使役文の行為連鎖：





(私の妻はバトをすわらせました。) <AD>

- c. **Dulmaa namajg ger-t-ee oč-uul-a-v.**  
 Dulmaa:NOM 1SG:ACC house-LOC-REF go-CST-EP-PST  
 (ドルマーは私を自宅に行かせました。) <AD>

(3-3a)の語幹動詞には使役形接尾辞-aa-が、(3-3b)には-lga-が、(3-3c)には uul-が、それぞれ、付加している。基底文は、(3-4a, b, c)に見るように、すべて自動詞文である。

- (3-4) a. **Miniĵ dūü önöödör Darxan-ruu buc-laa.**  
 1SG:GEN younger brother:NOM today Darxan-DRC return-RPST  
 (私の弟は、今日、ダルハンへ帰りました。)
- b. **Bat suu-v.**  
 Bat:NOM sit down-PST  
 (バトはすわりました。)
- c. **Bi ger-t n' oč-i-v.**  
 1SG:NOM house-LOC 3PCL go-EP-PST  
 (私は彼女の家に行きました。)

使役化する過程で、主格形の使役主語が導入されるのに伴い、(3-4a, b, c)の主格形主語は再帰所有形や対格形の使役補語に変わる。基底文と使役文の対応を文法役割と意味役割から図示すると、次のようになる。

- (3-5) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [V:INTRAN:ACTION]
- b. 使役文 : [CAUS-S:NOM.CAUSER] + [CAUS-C: ACC/REF/PC:PAT > AGT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]
- 

(3-5a)の主語の行為主性は(3-5b)の使役補語の二次的行為主として引き継がれている。これにより、使役補語の意味特性は[+animate, +instigating, -controllable]と指定される#15。

使役動詞の語幹となる行為タイプの自動詞には、次のようなものが含まれる。

(3-6) 「させる」型使役動詞語幹となる行為タイプの自動詞 :

ažillax 「働く」; amžix 「する暇がある」; barildax 「相撲する」; bosox 「起きる」; garax 「外出する」; idešlex 「(家畜が) 食べる」; irex 「来る」; nisex 「飛ぶ」; orox 「入る」; toglox 「遊ぶ」; tölöx 「支払う」; xatirax 「(馬が) ハテイルで走る」; xüleex 「待つ」; xevtex 「横たわる」; javax 「行く」; güjx 「走る」;

zodoldox 「喧嘩する」; orolcox 「参加する」 etc.

### 3.2.1.2 活動タイプの自動詞語幹

- (3-7) a. **Či namajg zov-oo-ž baj-na.**  
 2SG:NOM 1SG:ACC worry-CST-ICC be-PRS  
 (君は私を心配させています。) <AD>
- b. **Ta xüüxd-ee ix l öls-gö-žee.**  
 2SG:NOM child-REF much just feel hungry-CST-PPST  
 (あなたは自分の子供をひどく飢えさせました。) <M: 120>
- c. **Či namajg ix aj-lga-laa.**  
 2SG:NOM 1SG:ACC very fear-CST-RPST  
 (君は私を大変怖がらせました。) <AD>
- d. **Bid Romeo, Žuljett-a-d togl-o-ž, ojuutn-uud-ijg  
 1PL:NOM Romeo Juliet-EP-DAT play-ICC student-PL-ACC  
 ujl-uul-ž baj-laa.  
 cry-CST-ICC be-RPST**  
 (私たちはロメオとジュリエットを演じて、学生たちを泣かせました。)  
 <ÖS: 2001. 2. 23.>

(3-7a)の語幹動詞には使役形接尾辞-oo-が、(3-7b)には-gö-が、(3-7c)には-lga-が、(3-7d)には-uul-が、各々、後続している。対応する基底文は、次の通りである。

- (3-8) a. **Bi zov-ž baj-na.**  
 1SG:NOM worry-ICC be-PRS  
 (私は心配しています。)
- b. **Tanij xüüxed ix l öls-žee.**  
 2SG:GEN child:NOM much just feel hungry-PPST  
 (あなたのお子さんはひどく空腹を覚えました。)
- c. **Bi ix aj-laa.**  
 1SG:NOM very fear-RPST  
 (私は大変恐れました。)
- d. **Ojuutn-uud ujl-ž baj-laa.**  
 student-PL:NOM cry-ICC be-RPST  
 (学生たちは泣いていました。)

(3-8a, b, c, d)は、認識や感情、生理現象などを表す活動タイプの動詞を述語に置く自動詞文である。主語の意味役割は、したがって、経験主(EXPERIENCER, EXP)と考えられる。これらの文が、(3-7a, b, c, d)に使役化する過程で、主格形主語は対格形あ



るいは再帰所有形の使役補語に交替するが、意味役割は二次的にはあるが経験主を保持する。

(3-9) a. 基底文 : [S:NOM:EXP] + [V:INTRAN:ACTIVITY]

b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:ACC/REF/PC:PAT] > EXP +  
[CAUS-V: TRAN:ACTION]

使役補語は一次的には被態主、二次的には経験主であるから、その意味特性は、[+animate, +instigating, -controllable]となる。これは語幹動詞が行為タイプの場合と同じである。

使役動詞の語幹が活動タイプの自動詞には、次のようなものが挙げられる。

(3-10) 「させる」型使役動詞語幹となる活動タイプの自動詞 :

bajarlax 「喜ぶ」; gomdox 「立腹する」; gutrax 「悲しむ」; gjalajx 「輝く」; sergex 「目覚める」; tajvšrax 「静まる」; tanilcax 「知り合う」; targalax 「太る」; untax 「眠る」; üjmex 「混乱する」; xarax 「見る」; dursax 「思い出す」; cadax 「満足する」; taax 「推測する」 etc.

### 3.2.1.3 自発タイプの自動詞

第2節で使役形接尾辞が付加することにより行為タイプの他動詞を形成するのは、自発タイプの自動詞が語幹となる場合であることを見た。ところが、自発タイプの自動詞が、「させる」型の使役動詞になるように思われる例が存在する。

(3-11) a. **Ted šine šine üjldver bari-ž, až üildver-ee,**  
3PL:NOM new new factory:PC build-ICC industry-REF  
**xögž-üül-ž baj-na.#16**  
develop-CST-ICC be-PRS

(彼らは、数々の新しい工場を建設して、工業を発展させています。) <L: 123>

b. **Bid jamaan-ij süü-g xöör-üül-ž baj-na.**  
1SG:NOM goat-GEN milk-ACC bubble-CST-ICC be-PRS

(私たちは山羊のミルクを泡立たせています。) <AD>

(3-11a, b)は、使役形接尾辞-üül-の接続する使役動詞を含み、語幹動詞は、次の基底文からわかるように、自発タイプの自動詞である。

(3-12) a. **Až üjldver n' xögž-i-ž baj-na.**  
industry:NOM 3PCL develop-EP-ICC be-PRS

(工業は発展しています。)

- b. **Jamaan-ij süü n' xöör-ž baj-na.**  
 goat-GEN milk:NOM 3PCL bubble-ICC be-PRS  
 (山羊のミルクが泡立っています。)

(3-12a)の xögžix 「発展する」も、(3-12b)の xööröx 「泡立つ」も、自発タイプに属している。それぞれ、(3-11a)と(3-11b)へ使役化する過程で、主格形主語から再帰所有形もしくは対格形使役補語と交替するわけであるが、行為や活動タイプの使役動詞の場合とは異なり、有生性と制御可能性に限ると[-animate, -controllable]で、第 2.2.2 節で扱った「する」型使役文の場合と一致する。

では、自発タイプ動詞を語幹とし、対格形/再帰所有形/欠如格形で、しかも[-animate, -controllable]の意味特性を有する使役補語を共有しているにもかかわらず、「する」型と「させる」型の使役文に分かれる要因は、どこにあるのだろうか。この要因を担うのが、3つ目の意味特性の発動性(Instigativeness)なのである。Næss(2007)はこの特性を非有生であっても自ら何らかのエネルギーや作用を発動する実体に付与する。

第 2 節で採り上げた「する」型と本節の「させる」型について発動性を考慮して使役補語に適用すると、次のような意味特性の違いを読み取ることができる。

(3-13) a. 「する」型使役文の使役補語の意味特性：

[-animate, -instigating, -controllable]

b. 「させる」型使役文の使役補語の意味特性：

[-animate, +instigating, -controllable]

(3-12a)では、「工業」自体が力を発揮して「発展している」と解釈される。(3-12b)では「山羊のミルク」が発酵という内在的な化学作用を発動するという読みである。この原動主(CAUSER)の意味役割を担ったまま、使役化により主語から使役補語に交替することで、使役主語からの操作力を受けて自ら事象を発動させる意味合いが生じるのである。

(3-14) a. 基底文：[S:NOM:CAUSER] + [V:INTRAN:SPONTANEITY]

b. 使役文：[CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:ACC/REF/PC:PAT] > CAUSER  
 + [CAUS-V:TRAN:ACTION]

### 3.2.1.4 まとめ

対格形/再帰所有形/欠如格形の使役補語に現れる「させる」型使役文には、次のような特徴がある。

- (3-15) A. 語幹動詞は自動詞である。
- B. 使役主語は主格形をとる。使役補語の格形は対格形/再帰所有形/欠如格形である。
- C. 語幹動詞の意味タイプは、原則として、行為か活動である。ただし、発動性を発揮できる場合、自発が利用可能である。
- D. 動詞の意味タイプの階層は、使役<行為/活動/発動的自発である。行為または活動または発動的自発の動詞語幹に使役形接尾辞が付加することで、1つ左の使役の意味タイプに移行する。
- E. 使役主語の意味役割は、原動主である。使役補語の意味役割は、  
(i)行為動詞語幹の場合、被態主>行為主、  
(ii)活動動詞語幹の場合、被態主>経験主、  
(iii)発動的自発動詞語幹の場合、被態主>原動主である。
- F. 使役補語の意味特性は、[+/-animate, +instigating, -controllable]である。
- G. 使役主語の操作力(FM)は、「する」型ほどではないものの、比較的強い。使役補語の行為力(FA)も、行為を遂行したり、発動したり、経験したりする点で、比較的強い。

### 3.2.2 与格形の使役補語を持つ使役文

#### 3.2.2.1 行為タイプの他動詞語幹

- (3-16) a. **Egč**                    **xüüxd-üüd-d-ee**                    **dulaan** **deel**                    **öms-gö-v.**  
mother:NOM child-PL-DAT-REF warm gown:PC wear-CST-PST  
(母親は自分の子供たちに温かい上着を着させました。) <L: 118>
- b. **Dorž**                    **xüü-d-ee**                    **süü**                    **uu-lga-v.**  
Dorž:NOM son-DAT-REF milk:PC drink-CST-PST  
(ドルジは自分の息子にミルクを飲ませました。) <M: 119>
- c. **Bagš**                    **nadad**                    **ter**                    **bičig-ijg**                    **unš-uul-a-v.**  
teacher:NOM 1SG:DAT that document-ACC read-CST-EP-PST  
(先生は私に文書を読ませました。) <AD>

(3-16a)では行為タイプの他動詞 ömsöx「着る」を語幹として使役形接尾辞-gö-が後続している。同様に、(3-16b)では uux「飲む」に-lga-が、(3-16c)では unšix「読む」に-uul-が接続し使役動詞を形成している。これらの語幹動詞を述語とする基底文は、次の通りである。

- (3-17) a. **Xüüxd-üüd**                    **n'**                    **dulaan** **deel**                    **öms-ö-v.**  
child-PL:NOM 3PCL warm gown:PC wear-EP-PST  
(彼女の子供たちは暖かい上着を着ました。)

- b. **Xüü n' süü uu-v.**  
 son:NOM 3PCL milk:PC drink-PST  
 (彼の息子はミルクを飲みました。)
- c. **Bi ter bičig-ijg unš-i-v.**  
 1SG:NOM that document-ACC read-EP-PST  
 (私はその文書を読みました。)

(3-17a, b, c)はすべて他動詞文である。使役化の過程で主格形主語は与格形使役補語と交替する一方で、欠如格形ないしは対格形の直接目的語はそのまま対応する使役文に引き継がれる。(3-16a, b, c)の使役補語の意味特性は、[+animate, +instigating, -controllable]である。

基底文と使役文の対応を記述すると、次のようになる。

- (3-18) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [V:TRAN:ACTION]
- b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:DAT:PAT > AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]
- 

(3-18a)の主語の行為性は、(3-18b)の使役補語の二次的行為主へ引き継がれる。

### 3.2.2.2 活動タイプの他動詞語幹

- (3-19) a. **Aav n' tüünd öör-ijn-xöö temdeglel-ijn**  
 father:NOM 3PCL 3SG:DAT self-GEN-REF note-GEN  
**devtr-ijg garg-a-ž övöl, xavar, zun-ij tuxaj**  
 notebook-ACC take out-ICC winter spring summer-GEN about  
**mön l ingež jar'-dag baj-sn-ij n'**  
 the same just in this way speak-HBT be-PF-ACC 3PCL  
**üz-üül-žee.**<sup>#17</sup>  
 see-CST-PPST  
 (父親が彼に自分のメモ帳を取り出して、冬、春、夏について実際にこのように普段語っていることを見せました。) <U: 28>
- b. **Gol түнш OXO-d bol-ž buj üjl javdal,**  
 main customer:NOM Russia-LOC occur-ICC being affair event:NOM  
**caašid juu bol-o-x ve ge-dg-ijg uurxajč-d-a-d**  
 later on what:PC become-EP-NPS Q say-HBT-ACC miner-PL-EP-DAT  
**zöv ojlg-uul-laa.**  
 exactly understand-CST-RPST  
 (主だった取引相手は、ロシアで起こっている事態が今後どうなるかと言わ

れているのかを、坑夫たちに正確に理解させました。) <ÖS: 2001.1.25.>

(3-19a)では知覚動詞 *üzex* 「見る」を、(3-19b)では認識動詞 *ojlgox* 「理解する」を、各々、語幹動詞として、それらに使役形接尾辞 *-uul/-üül-* が付加して、使役動詞が形成されている。対応する基底文は、次の通りである。

- (3-20) a. **Ter övöl, xavar, zun-ij tuxaj mön l**  
 3SG:NOM winter summer summer-GEN about the same just  
**ingež jar'-dag baj-sn-ij n' üz-žee.**  
 in this way speak-HBT be-PF-ACC 3PCL see-PPST  
 (彼は、冬、春、夏について実際にこのように普段語っているのを見ました。)
- b. **Uurxajč-d n' OXO-d bol-ž buj üjl javdal,**  
 miner-PL:NOM 3PCL Russia-LOC occur-ICC being affair event:NOM  
**caašid juu bol-o-x ve ge-dg-ijg ojlgox-laa.**  
 later on what:PC become-EP-NPS Q say-HBT-ACC understand-RPST  
 (坑夫たちは、ロシアで起こっている事態が今後どうなるかと言われているかを理解しました。)

(3-20a, b)と(3-19a, b)を見比べると、(3-20a, b)の他動詞文に新たに主格形使役主語が参与することで、元の主格形主語は使役化により与格形使役補語と交替する。一方、直接目的語は対格形のままである。

活動タイプ動詞語幹の使役文でも、使役補語の意味特性は、行為タイプの動詞語幹の使役文と同様に、[+animate, +instigating, -controllable]である。ただし、意味役割には若干の相違が認められる。

- (3-21) a. 基底文 : [S:NOM:EXP] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [V:TRAN:ACTIVITY]
- b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:DAT:PAT] > EXP +  
 [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [CAUS-V:TRAN:ACTIVITY]
- 

(3-21a)の主格形主語の意味役割である経験主は、(3-21b)の使役補語の二次的経験主として引き継がれている。

### 3.2.2.3 まとめ

与格形の使役補語を持つ「させる」型の使役文には、次のような特徴がある。

(3-22) A. 語幹は他動詞である。

B. 使役主語は主格形をとる。使役補語は与格形である。

- C. 語幹動詞の意味タイプは、行為か活動である。
- D. 動詞の意味タイプの階層は、使役≪行為/活動である。行為または活動の動詞語幹に使役形接尾辞が付加することで、1つ左の使役に移行する。
- E. 使役主語の意味役割は原動主である。使役補語の意味役割は、  
 (i)行為タイプの場合、被態主➤行為主、  
 (ii)活動タイプの場合、被態主➤経験主である。
- F. 使役補語の意味特性は、[+animate, +instigating, -controllable]である。
- G. 使役主語の操作力(FM)は「する」型ほどではないが、ある程度強い。  
 使役補語の行為力(FA)は、使役主語の制御下で、自ら行為や活動を発動できる程度に強い。

### 3.2.3 具格形の使役補語を持つ使役文

この使役文は、現れる名詞句の数に応じて4つに下位区分される。

#### 3.2.3.1 使役主語と使役補語から成る使役文

(3-23) a. **Ter bidneer tusl-uul-san.**

3SG:NOM 1PL:INS help-CST-PF

(彼は私たちに手伝わせました。) <M: 259>

b. **Ta manaar daxjaad üjlčil-üül-eerej.**

2SG:NOM 1PL:INS again serve-CST-OPT

(あなたは私たちにもう一度サービスさせてください。) <AD>

(3-23a, b)は、行為タイプ動詞 *tuslax* 「手伝う」及び *üjlčlex* 「サービスする」を語幹として、使役形接尾辞 *-uul/-üül-* が後続している。その基底文は、それぞれ、(3-24a, b) のようになるだろう。

(3-24) a. **Bid tusal-san.**

1PL:NOM help-PF

(私たちは手伝いました。)

a'. **Bid tüünd / ter ažil-d tusal-san.**

1PL:NOM 3SG:DAT/ that work-DAT help-PF

(私たちは彼を/その仕事を手伝いました。)

b. **Bid daxjaad üjlčil-sen.**

1PL:NOM again serve-PF

(私たちはもう一度サービスしました。)

b'. **Bid daxjaad tand / ex oron-d-oo üjlčil-sen.**

1PL:NOM again 2SG:DAT motherland-DAT-REF serve-PF

(私たちはもう一度あなたに/自分の祖国に仕えました。)

tuslax も üjlčilex も(3-24a, b)に見るように、自動詞文の述語となる。目的補語を必要とする場合、(3-24a', b')に示すように、与格形をとる。この目的補語は[+animate]でも[-animate]でもよいが、(3-25a, b)に記すように、後者を使役文の使役補語とすることはできない。

(3-25) a. \*Ter            ter    aži-aar    tusl-uul-san.

3SG:NOM    that    work-INS    help-CST-PF

(彼はその仕事に手伝わせました。)

b. \*Ta                ex oron-oor-oo            üjlčl-üül-sen.

2SG:NOM    motherland-INS-REF    serve-CST-PF

(あなたは自分の祖国にサービスさせました。)

(3-25a, b)の不適合性から、使役文の使役補語になり得るのは専ら[+animate]の名詞句のみである。[+animate]であれば、自ら行為を始動できるので、[+instigating]である。ただし、その行為は使役主語の制御下にあるので、[-controllable]と考えられる。

基底文と使役文の意味役割を含めた対応関係は、次の通りである。

(3-26) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + ([DO:DAT:REC]) + [V:INTRAN:ACTION]

b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:DAT:REC] > AGT] +  
[CAUS-V:TRAN:ACTION]

基底文が主語と動詞だけの場合は、主格形主語が与格形使役補語と交替し、その行為性は二次的な意味役割に引き継がれる。動詞は使役化により自動詞から他動詞に変換される<sup>#18</sup>。

### 3.2.3.2 具格形の使役補語と対格形/再帰所有形/欠如格形の直接目的語を持つ使役文

(3-27) a. Eež                nadaar    xaalga    xaa-lga-laa.

mother:NOM    1SG:INS    door:PC    close-CST-RPST

(母は私にドアを閉めさせました。) <AD>

b. Aav                n'        temdeglel-ijn    devtr-ee            garg-aad,

father:NOM    3PCL    note-GEN    notebook-REF    take out-PCC

Mitja-g-aar    öör-ijn    n'        xüsl-ijg    bič-üül-e-v.

Mitja-EP-INS    self-GEN    3PCL    wish-ACC    write-CST-EP-PST

(父親は自分のメモ帳を取り出してから、ミトヤに自分の願いを書かせました。) <U: 28>

(3-27a)では、欠如格形直接目的語 xaalga 「ドア」があり、他動詞語幹 xaax 「閉める」

に使役形接尾辞-lga-が付加している。(3-27b)では、対格形直接目的語 xüsl-ijg 「願い」と他動詞語幹 bičix 「書く」に-üül-の後続する使役動詞が現れている。対応する基底文は、次の形をとる。

(3-28) a. **Bi xaalga xaa-laa.**

1SG:NOM door:PC close-RPST

(私はドアを閉めました。)

b. **Mitja öör-ijn n' xüsl-ijg bič-i-v.**

Mitja:NOM self-GEN 3PCL wish-ACC write-EP-PST

(ミトヤは自分の願いを書きました。)

(3-28a, b)の主格形主語は、使役化の過程で具格形使役補語と交替する一方、直接目的語は格形を変えることなく引き継がれる。(3-27a, b)とも使役補語は[+animate]であり、[-animate]であれば、(3-29b)のように不適格となる。

(3-29) a. **Luvsan saja noxoj-g-oor-oo neg tuulaj bari-uul-laa.**

Luvsan:NOM recently dog-EP-INS-REF one hare:PC catch-CST-RPST

(ロブサンは最近、自分の犬に1羽のウサギを捕えさせました。) <M: 118>

b. \***Bi xarandaa-g-aar-aa neg zurag zur-uul-laa.**

1SG:NOM pencil-EP-INS-REF one picture:PC draw-CST-RPST

(私は自分の鉛筆に1枚の絵を描かせました。)

(3-29a)の使役補語は noxoj 「犬」で[+animate]であり、動詞の示す行為を自ら発動することができる。他方、(3-29b)の xarandaa 「鉛筆」は[-animate]であり、そのような発動力はない。したがって、使役補語の意味特性は、[+animate, +instigating, -controllable]ということになる。

意味役割を含む基底文と使役文の対応は、次の通りである。

(3-30) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [V:TRAN:ACTION]

b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:INS:PAT] > AGT +  
 [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]

(3-30a)の主語の行為主性は、(3-30b)の使役補語の二次的行為主に継承されている。

### 3.2.3.3 具格形の使役補語と与格形目的語を持つ使役文

(3-31) **Bi xüü-g-eer-ee tedend tusl-a-lc-uul-a-v.**

1SG:NOM son-EP-INS-REF 3PL:DAT help-EP-COOP-CST-EP-PST



(私は自分の息子と一緒に彼らを手伝わせました。) <M: 130>

使役補語は具格形であるが、目的語は対格形ではなく与格形である。この使役文に対応する基底文は、(3-32)である。

- (3-32) **Minij xüü tedend tusal-a-lc-a-v.**  
1SG:GEN son:NOM 3PL:DAT help-EP-COOP-EP-PST  
(私の息子は一緒に彼らの手伝いをしました。)

tusalalcax「一緒に手伝う」は与格形名詞句を目的語に指定する。使役化により、(3-32)の主格形主語は具格形使役補語になる一方で、与格形目的語はそのままの形を保持する。

意味役割を含む基底文と使役文の対応は、次のようになる。

- (3-33) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:DAT:PAT] + [V:TRAN:ACTION]  
b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:INS:PAT] > AGT +  
[DO:DAT:PAT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]
- 

### 3.2.3.4 具格形の使役補語と与格形及び対格形/再帰所有形/欠如格形の目的語を持つ使役文

Janhunen(2012: 249)によると、「行為者(actant)の最大数は、二項他動詞(ditransitive verbs)に基づいた使役文で検証される」と述べた上で、「4つの行為者まで許される」と説明する。

- (3-34) a. 使役者(causer) = 主語(nominative)  
b. 被使役者(causee) = 副詞句(instrumental)  
c. 受領主(recipient) = 副詞句(dative)  
d. 被態主(patient) = 目的語(acc/ref/Φ)

Janhunenの(3-34a, b, c, d)に示した「4つの行為者」を備えた使役文の例として、(3-35a, b)が挙げられる。

- (3-35) a. **Bi najz-aar-aa bagš-i-d zaxia bič-üül-sen.**  
1SG:NOM friend-INS-REF teacher-EP-DAT letter:PC write-CST-PF  
(私は自分の友人に先生宛てに手紙を書かせました。)  
<Janhunen 2012: 249>

- b. **Gerel Dendev-*eer* Naran-d ene nom-ijg ög-*үүл*-e-v.**  
 Gerel:NOM Dendev-INS Naran-DAT this book-ACC give-CST-PST  
 (ゲレルはデンドエブにナランへこの本をあげさせました。) <AD>

(3-35a, b)に対応する基底文は、(3-36a, b)となる。

- (3-36) a. **Minij najz bagš-i-d zaxia bič-sen.**  
 1SG:GEN friend:NOM teacher-EP-DAT letter:PC write-PF  
 (私の友人は先生に手紙を書きました。)

- b. **Dendev Naran-d ene nom-ijg ög-*ө*-v.**  
 Dendev:NOM Naran-DAT this book-ACC give-EP-PST  
 (デンドエブはナランにこの手紙をあげました。)

(3-36a)の *bičix* 「書く」、(3-36b)の *ögöx* 「与える」は、与格形間接目的語と対格形/再帰所有形/欠如格形直接目的語を項として指定できる二項他動詞(ditransitive verbs)である。(3-35a, b)への使役化により、主格形主語が具格形使役補語に交替するのに対し、2つの目的語はそのままの形で使役文中に残る。

使役補語の意味特性は両方とも[+animate, +instigating, -controllable]であり、語幹動詞は行為タイプである。

基底文と使役文の意味役割を含めた対応関係は、次のようになる。

- (3-37) a. 基底文:[S:NOM:AGT] + [IO:DAT:REC] + [DO:ACC/REF/PC:TH] +  
 [V:TRAN:ACTION]  
 b. 使役文:[CAUS-S:NOM:CAUSER] + [CAUS-C:INS:PAT] > AGT + [IO:DAT:REC]  
 + [DO:ACC/REF/PC:TH] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]
- 

### 3.2.3.5 まとめ

使役補語が具格形の「させる」型使役文には、次のような特徴が見出せる。

- (3-38) A. 語幹は他動詞である。1項他動詞でも2項他動詞でもよい。  
 B. 使役主語は主格形である。使役補語は具格形である。  
 C. 語幹動詞の意味タイプは行為である。  
 D. 動詞の意味タイプの階層は、使役<<行為である。行為タイプの動詞語幹に使役形接尾辞が付加することにより、1つ左の使役の意味タイプへ移行する。  
 E. 使役主語の意味役割は、原動主である。使役補語の意味役割は、一次的では被態主、二次的では行為主である。

- F. 使役補語の意味特性は、[+animate, +instigating, -controllable]である。
- G. 使役主語の操作力(FM)は「する」型ほど強くはないが、使役補語に行為を引き起こさせる程度の強さを発揮する。使役補語の行為力(FA)は、使役主語の制御下にあるものの、自ら行為できる程度の強さを持つ。

### 3.2.4 全体のまとめ

「させる」型の使役文を成立させる特徴をまとめると、次のようになる。

- (3-39) A. 動詞語幹は、自動詞か他動詞である。
  - B. 使役主語の格形は、主格形である。  
使役補語の格形は、
    - (i)自動詞語幹の場合、対格形/再帰所有形/欠如格形を、
    - (ii)他動詞語幹の場合、与格形か具格形のどちらかをとる。
  - C. 語幹動詞の意味タイプは、行為か活動である。ただし、使役補語の格形が対格形/再帰所有形/欠如格形である場合、自発タイプが現れることがある。
  - D. 動詞の意味タイプの階層は、使役≪行為/活動/発動的自発である。行為か活動か発動的自発動詞語幹に使役形接尾辞が付加することで、1つ左の使役へと移行する。
  - E. 使役主語の意味役割は原動主である。  
使役補語の意味役割は、
    - (i)語幹動詞が行為の意味タイプの場合、被態主▶行為主、
    - (ii)語幹動詞が活動の意味タイプの場合、被態主▶経験主である。
    - (iii)語幹動詞が発動的自発の意味タイプの場合、被態主▶原動主である。
  - F. 使役補語の意味特性は、[+/-animate, +instigating, -controllable]である。原則として、有生性(Animacy)の値はプラスであるが(i.e. [+animate])、語幹動詞が自動詞で意味タイプが自発、さらに自らエネルギーを発揮できる場合に限り、マイナスでもよい(i.e. [-animate])。
  - G. 使役主語の操作力(Force of Manipulation, FM)は、「する」型程ではないが、使役補語に行為を発動させる程度の強さを持つ。使役補語の行為力(Force of Action, FA)は、使役主語の制御下で、一定の行為を自ら発動できる程度の強さを有する<sup>#19</sup>。

## 4. 「してもらう」型使役文

モンゴル語の使役文には、使役主語に恩恵や利益をもたらす意味の「してもらう」型が存在する。この受益型使役文の使役補語は、対格形/再帰所有形/欠如格形、与格形、具格形の3つの異なる格形で実現する。以下では、この順で考察を進めていく。

## 4.1 対格形/再帰所有形/欠如格形の使役補語を持つ使役文

## 4.1.1 見せかけの使役補語と本物の使役補語

(4-1) a. **Ter eregtej xooln-ij daraa üs-ee zas-uul-san.**

that man:NOM meal-GEN after hair-REF repair-CST-PF

(その男は、食後に、自分の髪を散髪してもらいました。)

&lt;Baatarsukh 2009: 122&gt;

b. **Eceg n' ter nom-ijg ol-uul-a-v.**

father:NOM 3PCL that book-ACC find-CST-EP-PST

(彼の父親はその本を見つけてもらいました。) &lt;M: 130&gt;

(4-1a)は語幹動詞 *zasax* 「整える」に、(4-1b)は *olox* 「見つける」に、各々、使役形接尾辞 *-uul-* が接続して使役動詞を形成している。対応する基底文は、当然、語幹の行為タイプの他動詞を述語とし、使役補語を主格形主語とする他動詞が期待されるが、実際は、次のような不適格文が生じてしまう。

(4-2) a. **\*Tüünij üs xooln-ij daraa zas-san.**

3SG:GEN hair:NOM meal-GEN after repair-PF

(彼の髪が、食後に、散髪しました。)

b. **\*Ter nom ol-o-v.**

that book:NOM find-EP-PST

(その本が見つけました。)

(4-2a, b)の不適格性の理由は2つある。1つ目の理由は、述語動詞が他動詞であるのに直接目的語がないということである。2つ目の理由は、橋本(2003)で言及したように、モンゴル語の他動詞の主語は自らエネルギーを発揮できる[+instigating]なものでなければならないということである。(4-2a)の主語 *üs* 「髪」も、(4-2b)の主語 *nom* 「本」も、この要件を満たしていない。

(4-1a, b)の適格な基底文は、次の形をとる。

(4-3) a. **Xen neg n' xooln-ij daraa ter eregtej-g-ijn üs-ijg zas-san.**

someone:NOM meal-GEN after that man-EP-GEN hair-ACC repair-PF

(誰かが、食後に、その男の髪を散髪しました。)

b. **Xen neg n' tüünij ecg-ijn nom-ijg ol-o-v.**

someone:NOM 3SG:GEN father-GEN book-ACC find-EP-PST

(誰かが彼の父親の本を見つけてました。)

(4-3a, b)と(4-1a, b)を見比べると、興味深い交替のある事実気が付く。最初に、使

役化の過程で、直接目的語の修飾要素であった(4-3a)の *ter eregtej* 「その男」や(4-3b)の *tüünij eceg* 「彼の父親」が使役主語として自立した主格形となる。次に、直接目的語が元の格形を保持したまま文意に沿うように修飾要素を修正する。最後に、他動詞主語が削除されるため、実際の使役補語であるはずの行為主は、使役文では潜在化(implicit)する。この交替を表示すると、次のようになる。

- (4-4) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:ATTR&ACC/REF/PC:PAT] + [V:TRAN:ACTION]
- b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER>BEN] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] +  
[CAUS-C:IMPLICIT=φ:PAT>AGT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]

(4-4a)と(4-4b)の対応からわかる通り、対格形/再帰所有形/欠如格形名詞句は表面上使役補語に見えるが、実際には直接目的語であり、本当の使役補語は潜在化したまま暗示されるだけで、顕在形としては具現しない。使役主語の意味役割は原動主と受益主(BENEFACTIVE, BEN)に分かれる。一つの項の担う意味役割が対等な関係で分離する場合は、CAUSER>BENのように>の記号で表示する。潜在的使役補語の意味特性は、自らの意志で動詞語幹の示す行為を遂行する点で、[+animate, +instigating, +controllable]と考えられる。

(4-1a, b)の直接目的語は無生物であるが、有生物であってもよい。

- (4-5) a. **Bi bajr-ijn-xaa žoom-ijg ustg-uul-san.**  
1SG:NOM apartment-GEN-REF cockroach-ACC abolish-CST-PF  
(私はアパートのゴキブリを退治してもらいました。) <AD>
- b. **Exner n' nöxör-öö sull-uul-san.**  
wife:NOM 3PCL husband-REF release-CST-PF  
(妻は自分の夫を釈放してもらいました。) <AD>

(4-5a)の *žoom* 「ゴキブリ」も(4-5b)の *nöxör* 「夫」も、見かけ上の使役補語であるが、共に有生物である。対応する基底文は、次の通りである。

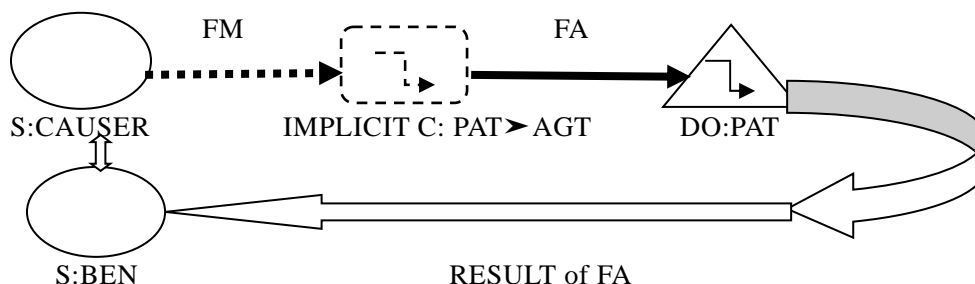
- (4-6) a. **Xen neg n' bajr-ijn min' žoom-ijg ustg-a-san.**  
someone:NOM apartment-GEN 1PCL cockroach-ACC abolish-EP-PF  
(誰かが私のアパートのゴキブリを退治しました。)
- b. **Xen neg n' nöxör-ijg n' sull-a-san.**  
someone:NOM husband-ACC 3PCL release-EP-PF  
(誰かが彼女の夫を釈放しました。)

(4-6a, b)が(4-5a, b)へ使役化する際に、(4-4a)と(4-4b)に見られるのとほぼ同じ交替が

行われ、主格形使役主語に二次的に受益主の意味役割が付与される一方、直接目的語は若干の修正を施されはするものの元の格形を保持する。また、実質的な使役補語は潜在化する。

「してもらう」型の受益使役文の行為連鎖を図示すると、次のようになる。

(4-7) 潜在的使役補語の受益使役文の行為連鎖：



使役主語は潜在的な使役補語に依頼、要請等の働きかけをすることで、動詞語幹の示す行為を遂行させる。これら一連の行為連鎖は暗示的なレベルにとどまるので、点線で表示されている。直接目的語の指示対象が被ったその行為の影響の結果が、恩恵や利益という形で使役主語に戻ってくる。使役主語は操作力を発動する出発点であると同時に、行為の結果の到達点でもあり、この再帰的な行為連鎖が、使役主語の担う原動主と受益主の2つの分離的な意味役割として具現されるのである。

#### 4.1.2 まとめ

使役補語が対格形/再帰所有形/欠如格形をとっているように見える受益使役文には、次のような特徴がある。

(4-8) A. 語幹動詞は、他動詞である。

B. 使役主語は主格形である。本当の使役補語は潜在化しており、実現形を持たない。対格形/再帰所有形/欠如格形の名詞句は、その点で、見せかけの使役補語(fake causative complement)であり、実際には直接目的語の文法役割を担う。

C. 語幹動詞の意味タイプは行為である。

D. 動詞の意味タイプの階層は、受益<<行為である。行為タイプの語幹動詞に使役形接尾辞が加わることで、1つ左の受益へ移行する<sup>#20</sup>。

E. 使役主語の意味役割は、原動主と受益主であるが、使役文で両者はこの順で再帰分離的に各意味役割を演じる(CAUSER>BEN)。使役補語の意味役割は、潜在的とはいえ、被態主>行為主である。

F. 使役補語の意味特性は、自ら積極的に行為の結果の恩恵を使役主語にもたらずという見地から、[+animate, +instigating, +controllable]と考えられる。

G. 使役主語の操作力(Force of Manipulation, FM)は潜在的な使役補語への暗示的

働きかけにとどまるという点と、使役補語の行為の結果を受動的に被るという点で弱い。反対に、使役補語の行為力(Force of Action, FA)は、使役主語に能動的に行為の結果を及ぼす点で強い。

#### 4.2 与格形の使役補語を持つ使役文

##### 4.2.1 語幹動詞が行為タイプの使役文

(4-9) a. **Övčtön            bariač-i-d            bari-uul-a-v.**  
patient:NOM    chiropractor-EP-DAT    touch-CST-EP-PST  
(患者は整体師に指圧してもらいました。) <M: 128>

b. **Bi            ter    setgüül-d            šülg-ee            nijtl-üül-ž            baj-san.**  
1SG:NOM    that    magazine-DAT    poem-REF    publish-CST-ICC    be-PF  
(私はその雑誌に自分の詩を掲載してもらいました。) <AD>

(4-9a)の使役補語は[+animate]の *bariač* 「整体師」で、与格形をとっている。*barix* 「さわる」は他動詞である。(4-9b)の使役補語 *setgüül* 「雑誌」は[-animate]であるが、この文では換喩(metonymy)として雑誌の発行元を指すと解釈できる。(4-9a, b)の基底文は、それぞれ、(4-10a, b)のようになる。

(4-10) a. **Bariač            övčtön-ijg            bari-v.**  
chiropractor:NOM    patient-ACC    touch-PST  
(整体師は患者を指圧しました。)

b. **Ter    setgüül            šülg-ijg            min'    nijtel-ž            baj-san.**  
that    magazine:NOM    poem-ACC    1PCL    publish-ICC    be-PF  
(その雑誌は私の詩を掲載していました。)

(4-10a)と(4-9a)の対応を見ると、使役化によって対格形直接目的語が主格形使役主語と、また主格形主語が与格形使役補語と交替している。他方、(4-10b)と(4-9b)の対応では、対格形直接目的語に後接した1人称所有接語が主格形使役主語と、主格形主語が与格形使役補語と交替するのに対し、対格形直接目的語はそのまま保持されている。これらの対応を図示すると、各々、(4-11a, b)及び(4-11c, d)のようになる。

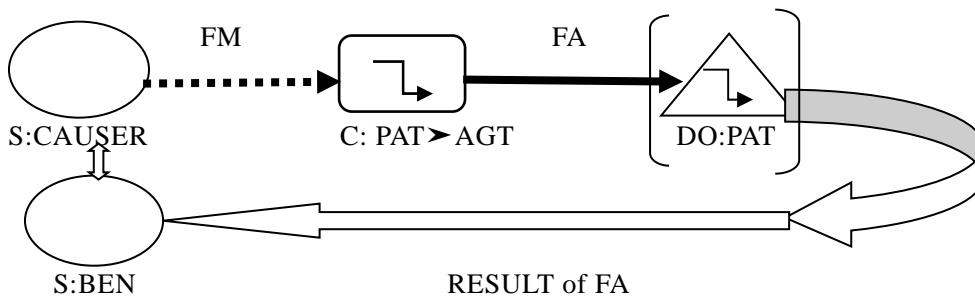
(4-11) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [V:TRAN:ACTION]

b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER > BEN] + [CAUS-C:DAT:PAT > AGT] +  
[CAUS-V:TRAN:ACTION]

- (4-11) c. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [DET:1PCL:POSS] + [V:TRAN:ACTION]
- d. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER > BEN] + [CAUS-C:DAT:PAT > AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]

使役補語は、使役主語からの働きかけを受けて行為を遂行し、その結果を恩恵や利益として使役主語に付与するのであるから、自ら行為をコントロールできると理解することができる。したがって、使役補語の意味特性は、[+animate, +instigating, +controllable]である。使役補語の具現した行為連鎖は、(4-7)とは異なり、次のような形をとる。

(4-12) 顕在的使役補語の受益型使役文の行為連鎖 :



カッコでくくられた部分は非顕在的な場合と顕在的な場合がある。たとえば、(4-9a)では使役主語自身(の身体)が語幹動詞の行為の及ぶ対象であるので再帰的な直接目的語としては顕在化せず、その行為の結果が外見上使役主語に直接的な形で帰着するのに対し、(4-9b)では使役主語と直接目的語の指示対象は各々異なる実体なので、直接目的語への働きかけを介して使役主語に行為の結果がもたらされると解釈できるのである。

#### 4.2.2 まとめ

使役補語が与格形の「してもらう」型使役文には、次の特徴が見られる。

- (4-13) A. 語幹動詞は他動詞である。  
 B. 使役主語は主格形を、使役補語は与格形をとる。  
 C. 語幹動詞の意味タイプは、行為である<sup>#21</sup>。  
 D. 動詞の意味タイプの階層は、受益<<行為である。  
 E. 使役主語の意味役割は原動主と受益主であり、両者はこの順で再帰分離的に各役割を担う。使役補語の意味役割は被態主>行為主である。  
 F. 使役補語の意味特性は、[+animate, +instigating, +controllable]である。



- G. 使役主語の操作力(Force of Manipulation, FM)は暗示的であると同時に、使役補語からの行為の結果を受動的に被るという点で弱い。反対に、使役補語の行為力(Force of Action, FA)は、自ら使役主語に能動的に行為の結果をもたらすという点で強い。

#### 4.3 具格形の使役補語を持つ使役文

##### 4.3.1 使役補語のみを持つ使役文

(4-14) a. **Bi mongol emč-*eer* emčl-*üül*-sen.**

1SG:NOM Mongolian doctor-INS treat-CST-PF

(私はモンゴル人の医者に治療してもらいました。) <AD>

b. **Aav n' eež-*eer* n' tüş-*üül*-ž ir-*žee*.**

father:NOM 3PCL mother-INS 3PCL support-CST-ICC come-PPST

(彼女の父親は彼女の母親に支えてもらって来ました。) <AD>

(4-14a)では emčlex「治療する」に、(4-14b)では tüşix「支える」に、各々、使役形接尾辞-üül-が付加して使役動詞を形成している。どちらの動詞も行為タイプの他動詞である。(4-14a, b)に対応する基底文は、次のようになる。

(4-15) a. **Mongol emč nama<sup>jg</sup> emčel-sen.**

Mongolian doctor:NOM 1SG:ACC treat-PF

(モンゴル人の医者が私を治療しました。)

b. **Eež n' aav-<sup>ijg</sup> n' tüş-<sup>i</sup>-ž ir-*žee*.**

mother:NOM 3PCL father-ACC 3PCL support-EP-ICC come-RPST

(彼女の母親が彼女の父親を支えて来ました。)

基底文と使役文の対応は、次の通りである。

(4-16) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [V:TRAN:ACTION]

b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER > BEN] + [CAUS-C:INS:PAT > AGT] +  
[CAUS-V:TRAN:ACTION]#22

使役化の過程で、(4-16a)の主格形主語は具格形使役補語に、対格形直接目的語は主格形使役主語に、それぞれ交差する形で交替する。使役主語から使役補語への操作力は、依頼・要請を含意するので弱い。使役補語から使役主語への行為力は強いと考えられる。使役補語は自ら主体的に行為できるので、その意味特性は、[+animate, +instigating, +controllable]である。

## 4.3.2 使役補語と直接目的語を持つ使役文

(4-17) a. **Bi**            **žixene angli xün-eer angli xel**  
 1SG:NOM native English person-INS English language:PC  
**zaa-lga-san.**  
 teach-CST-PF

(私はネイティブのイギリス人に英語を教えてもらいました。) <AD>

b. **Bi**            **bas nom-oo tanaar ing-üül-meer baj-na.**  
 1SG:NOM also book-REF 2SG:INS do like this-CST-DSR be-PRS  
 (私も自分の本をあなたにこのようにしてもらいたい。) <M: 267>

(4-17a)は *zaax* 「教える」を語幹として使役形接尾辞 *-lga-* が接続している。(4-17b)は *ingex* 「このようにする」を語幹として *-üül-* が後続する。どちらも語幹は行為タイプの他動詞である。対応する基底文は、次の通りである。

(4-18) a. **Žinxene angli xün nadad angli xel**  
 native English person:NOM 1SG:DAT English language:PC  
**zaa-san.**  
 teach-PF

(ネイティブのイギリス人が私に英語を教えました。)

b. **Ta nom-ijg min' nadad ing-e-ne.**  
 2SG:NOM book-ACC 1PCL 1SG:DAT do like this-PRS  
 (あなたは私の本を私にこのようにします。)

(4-18a, b)と(4-17a, b)を較べて見ると、使役化の際に、主格形主語が具格形使役補語と、与格形間接目的語が主格形使役主語と、それぞれ交替するのに対し、欠如格形あるいは1人称所有接語を従える対格形直接目的語はほぼそのままの形で保持される<sup>#23</sup>。

使役補語は自ら主体的に行為を発動できるため、行為力の度合いは大きく、意味特性は[+animate, +instigating, +controllable]となる。一方、使役主語は依頼・要請のような形で使役補語に働きかけることが含意されるが、その依頼・要請を受けるか否かはあくまで使役補語に委ねられているばかりか、使役補語から行為の結果を受動的に受け取るのであるから、操作力は弱いと考えられる。

実は、使役補語が[-animate]の例が観察される。

(4-19) a. **Övöl govi-jn ajmg-uud-a-d xümüüs mašin-aar**  
 winter govi-GEN province-PL-EP-LOC people:NOM car-INS  
**mal-ijn težeel tee-lge-deg.**<sup>#24</sup>  
 cattle-GEN food:PC carry-CST-HBT

(冬、ゴビの諸県では、人々は車で家畜の飼料を運んでもらいます。)

<M: 119>

b. **Bid**            **ene** **nom-ijg**        **ulsijn**        **xevlel-ijn**        **kombinat-aar**  
1PL:NOM    this    book-ACC    national    publication-GEN    combinat-INS  
**xevl-üül-e-x**                    **gež baj-na.**  
print-CST-EP-NPS    be about to do-PRS

(私たちはこの本を国立出版局に印刷してもらうところです。) <L: 120>

(4-19a)の使役補語 *mašin* 「車」も、(4-19b)の *ulsijn xevlelijn kombinat* 「国立出版局」も、[-animate]の名詞句である。では、[-animate]にもかかわらず、なぜ、使役主語に恩恵や利益を与える使役補語になれるのだろうか。

その理由は、使役補語自体に自ら行為を発動する能力が内包されているからである。(4-19a)の *mašin* は搭載したエンジンや車輪などの部品を駆動して自ら動くことが可能である。同様に、(4-19b)の *ulsijn xevlelijn kombinat* は、印刷や製本の設備とそこで働く人員から成る組織体であり、自ら一定の行為を遂行することができる。

使役補語自体の行為の発動性の存在は、対応する基底文の適格性から確認できる。

(4-20) a. **Övöl**        **govi-jn**        **ajmg-uud-a-d**                    **mašin**        **n'**        **xümüüs-ijn**  
winter    govi-GEN    province-PL-EP-LOC    car:NOM    3PCL    people-GEN  
**tul**                    **mal-ijn**        **težeel**        **tee-deg.**  
for the sake of    cattle-GEN    food:PC    carry-HBT

(冬、ゴビの諸県では、車が人々のために家畜の飼料を運びます。)

b. **Ulsijn**        **xevlel-ijn**                    **kombinat**        **bidnij**        **tul**  
national    publication-GEN    combinat:NOM    1PL:GEN    for the sake of  
**ene**    **nom-ijg**        **xevl-e-x**                    **gež baj-na.**  
this    book-ACC    print-EP-NPS    be about to do-PRS

(国立出版局は私たちのためにこの本を印刷するところです。)

(4-20a, b)から、(4-19a, b)の使役補語の意味特性は[-animate, +instigating, +controllable]ということになる。ただし、[-animate]であるとはいえ、自ら行為力を発揮できる必要がある。

基底文と使役文の対応関係は、次のようになる。

- (4-21) a. 基底文 : [S:NOM:AGT] + [IO:DAT/PP:BEN] + [DO:ACC/REF/PC:PAT] +  
 [V:TRAN:ACTION]
- b. 使役文 : [CAUS-S:NOM:CAUSER > BEN] + [CAUS-C:INS:PAT > AGT] +  
 [DO:ACC/REF/PC:PAT] + [CAUS-V:TRAN:ACTION]
- 

使役化の過程で、主格形主語は具格形使役補語と、与格形あるいは後置詞 *tul* 付き間接目的語は主格形使役主語と、それぞれ交替するのに対し、直接目的語の格形も意味役割も同じままである。注目したいのは、(4-21b)で使役主語が担う受益主が、(4-21a)の対応する間接目的語ですでに付与されている点である。これは、元々受益性の高い他動詞文を基底として使役文が派生したと考えられる。

### 4.3.3 まとめ

使役補語が具格形の「してもらう」型使役文には、次の特徴が見出される。

- (4-22) A. 語幹動詞は他動詞である。  
 B. 使役主語は主格形を、使役補語は具格形をとる。  
 C. 語幹動詞の意味タイプは、行為である。  
 D. 動詞の意味タイプの階層は、受益<<行為である。  
 E. 使役主語の意味役割は原動主と受益主であるが、両者はこの順で再帰分離的に各役割を担う。使役補語の意味役割は一次的には被態主、二次的には行為主である。  
 F. 使役補語の意味特性は、[+/-animate, +instigating, +controllable]である。  
 G. 使役主語の操作力(Force of Manipulation, FM)は暗示的であると同時に、使役補語の行為の結果を受動的に被るという点で弱い。反対に、使役補語の行為力(Force of Action, FA)は、自ら使役主語に能動的に行為の結果をもたらすという点で強い。

### 4.4 語幹動詞の意味タイプの階層の序列を確定する証拠

語幹動詞に 2 つの異なる使役形接尾辞が連続的に付加する二重使役動詞(double causative verbs)の事例が存在する。

- (4-23) Bi            Dorž-oor   xüü-d-ee            emij(g)            n'  
 1SG:NOM   Dorž-INS   son-DAT-REF   medicine-ACC   3PCL  
**uu-lg-uul-laa.**  
 drink-CST-CST-RPST

(私はドルジに[頼んで]自分の息子にその薬を飲ませてもらいました。)

(4-23)では、行為タイプの他動詞 *uux*「飲む」を語幹として、2つの使役形接尾辞 *-lga-* と *-uul-* がこの順で付加している。これらの接尾辞には、それぞれ異なる使役補語が対応している。

(4-24) a. *-lga-* ⇔ 与格形使役補語 : *xüü-d-ee*

b. *-uul-* ⇔ 具格形使役補語 : *Dorž-oor*

基底の他動詞文から出発して、(4-24a)、(4-24b)の順で使役補語が介入して使役文が派生すると考えると、次のようなプロセスを提示できる。

(4-25) a. **Xüü min' em-ij(g) n' uu-laa.**  
son:NOM 1PCL medicine-ACC 3PCL drink-RPST  
(私の息子はその薬を飲みました。)

↓

b. **Bi xüü-d-ee em-ij(g) n' uu-lga-laa.**  
1SG:NOM son-DAT-REF medicine-ACC 3PCL drink-CST-RPST  
(私は自分の息子にその薬を飲ませました。)

↓

c. **Bi Dorž-oor xüü-d-ee em-ij(g) n'**  
1SG:NOM Dorž-INS son-DAT-REF medicine-ACC 3PCL  
**uu-lg-uul-laa.**  
drink-CST-CST-RPST  
(私はドルジに[頼んで]自分の息子にその薬を飲ませてもらいました。)

(4-25a)の主格形主語は使役化により、(4-25b)で見るとように与格形使役補語と交替する。ここで派生する使役文は「させる」型である。次に、さらなる使役化により、具格形使役補語が導入され、(4-25c)の使役文が派生する。この文は恩恵や利益を表す「してもら」型である。

(4-23)の二重使役動詞の意味タイプの並びは<使役>+<受益>の「させてもらう」であって、<受益>+<使役>の「もらわさせる」ではない。行為タイプの語幹動詞に使役形接尾辞が付加して使役タイプに移行し、さらにもう1つ使役形接尾辞が加わり受益タイプに移行するのであれば、動詞の意味タイプの階層は、最終的に、次のように表示できる。

(4-26) 動詞の意味のタイプの階層<最終版>

受益<<使役<<行為/活動/発動的自発<<自発/状態<sup>#25</sup>

ただし、「してもらう」型の使役文は、(4-23)を除いてすべて行為タイプから使役タイプを飛び越える形で左端の受益タイプに移行している。このスキップの要因は、形態・統語という形式に求めるだけではなく、意味役割と意味特性という意味的要因にも求める必要があるのだろう。形式と意味とは、どちらが優先するのかという問題ではなく、コインの裏表のように、相補的で密接不可分な存在様式にあると捉えるのが妥当なように思われる。

#### 4.5 全体のまとめ

受益を表す「してもらう」型使役文を成立させる特徴を記すと、次のようになる。

(4-27) A. 語幹は他動詞である。

B. 使役主語の格形は主格形である。

使役補語の格形は、次の3つに分かれる：

- (i) 基底文に対格形/再帰所有形/欠如格形の直接目的語があるのに対し、主語が潜在的で不特定の場合、対応する使役補語も潜在的で不特定のままで、顕在化しない。
- (ii) 基底文に主格形主語と対格形/再帰所有形/欠如格形の直接目的語がある場合、使役補語は与格形か具格形のどちらかの格形をとる。
- (iii) 基底文が潜在的な使役補語か、あるいは、与格形間接目的語と対格形/再帰所有形/欠如格形の直接目的語の両方を持つ場合、使役補語は具格形の格形をとる。

C. 語幹動詞の意味タイプは、行為である。

D. 動詞の意味タイプの階層は、受益≪使役≪行為である。

二重使役動詞の意味タイプの移行から、使役形接尾辞が1つずつ付加する度に、行為から使役、使役から受益へと1つずつ左へ階層を移行させるはずである。ところが、多くの使役動詞は1つしか接尾辞を持たず、使役の意味タイプをスキップする形で左端の受益に移行する。2つの使役形接尾辞と意味タイプの順次移行との整合性から、見かけ上1つの使役形接尾辞に実際にはもう1つ非顕在型の接尾辞が付加すると仮定することが可能である。すなわち、動詞語幹に最初に非顕在的使役接尾辞が付加することにより、意味タイプは行為から使役へ移行し、さらに顕在的な接尾辞を加えることで、使役から受益へ移行すると考えるのである：

[V<sub>STEM</sub> + Φ<sub>CAUSATIVE SUFFIX</sub>]<sub>STEM</sub> + CAUSATIVE SUFFIX ⇒ BEN CAUSATIVE V

ただし、この非顕在的使役接尾辞は現段階ではあくまで理論的要請から生じた仮定上の実体であり、今後の研究でその妥当性を検討していく必要がある。

E. 使役主語は、原動主と受益主の意味役割を再帰分離的に担う。

使役補語は、被態主と行為主の意味役割を第1次的▶第2次的で担う。ただし、第2次的な行為主は、自らエネルギーを発動し、動作、運動、作用等ができれば、有生か無生かを問わない。

F. 使役補語の意味特性は[+/-animate, +instigating, +controllable]である。

G. 使役主語の操作力(Force of Manipulation, FM)は、暗示的であると同時に、使役補語の行為の結果を受動的に被るという点で弱い。

使役補語の行為力(Force of Action, FA)は、自ら使役主語に能動的に行為の結果をもたらすという点で強い。

## 5. 結論

「する」型、「させる」型、及び「してもらう」型の3つの異なる意味を表す使役文を成立させる要因を、形態・統語的な観点からだけではなく、意味の側面からも捉えようとするのが、本稿の目的であった。この考察を通して、7つのパラメータが示す特徴が重要な役割を演じている事実が明らかとなった。以下で、3つの意味の型を比較することに焦点を当てて、順次、各パラメータを見ていく。

A. パラメータ1：使役動詞語幹が自動詞か他動詞か。

表1

	自動詞	他動詞
「する」	○	△ <sup>*1</sup>
「させる」	○	○
「してもらう」	NA <sup>*2</sup>	○

\*1: 若干の語彙化された使役動詞の場合

\*2: NAはNot Attestedの略で、実際のデータに見当たらないことを示す。

B. パラメータ2: 使役補語の格形が対格形/再帰所有形/欠如格形か与格形か具格形か。

表2

	ACC/REF/PC	DAT	INS	IMPLICIT
「する」	○ <sup>*1</sup>	NA	NA	NA
「させる」	○ <sup>*2</sup>	○ <sup>*3</sup>	○ <sup>*3</sup>	NA
「してもらう」	NA	○ <sup>*4</sup>	○ <sup>*5</sup>	○ <sup>*6</sup>

\*1: ACC/REF/PCの名詞句は存在するが、これは見かけ上の使役補語であり、実態は直接目的語である。

\*2: 語幹が自動詞の場合。

\*3: 語幹が他動詞の場合。

\*4: 基底文にACC/REF/PCの直接目的語のある場合。

\*5: 基底文に潜在的な直接目的語か、あるいは DAT の間接目的語と ACC/REF/PC の直接目的語のある場合。

\*6: 基底文の主語が潜在的で不特定であり、ACC/REF/PC の直接目的語のある場合。

表 2 で注意したいのは、「する」型には実質的な使役補語が存在しないということである。それは、使役主語が原動主であると同時に語幹動詞の示す行為の行為主であり、文全体が使役的というよりはむしろ他動詞的に機能するからである。

格形の選択は、概ね、次の格形の利用可能性の階層に従う。

(5-1) 使役主語および使役補語の格形の利用可能性の階層：

主格形 > 対格形/再帰所有形/欠如格形 > 与格形 > 具格形

使役主語には専ら主格形が利用されるので、使役補語にはそれより右に位置する格形が選ばれる。使役主語に主格形、直接目的語に対格形/再帰所有形/欠如格形がすでに用いられていると、それより右の与格形か具格形が使役補語の格形として選択される。ただし、実際の選択には、他の要因も絡んでくると考えられる。

C. パラメータ 3：語幹動詞の意味タイプ

表 3

	状態	自発	活動	行為
「する」	○	○	NA	△ <sup>*1</sup>
「させる」	NA	△ <sup>*2</sup>	○	○
「してもらう」	NA	NA	NA	○

\*1: 限られた行為動詞が語彙化されて用いられる場合。

\*2: 自動詞で自らエネルギーを発動する使役補語と共起する場合。

D. パラメータ 4：語幹動詞と使役動詞の意味タイプ

使役形接尾辞が付加することにより、次の階層に従って、1 つずつ左へ移行する。

(5-2) 動詞の意味タイプの階層：

受益 << 使役 << 行為/活動/発動的自発 << 自発/状態

D-1. 語幹動詞が自発か状態の場合、派生する使役動詞は行為か活動に移行する。

D-2. 語幹動詞が行為か活動か発動的自発の場合、派生する使役動詞は使役に移行する。

D-3. 語幹動詞が行為で二重使役化する場合、使役から受益へ順次移行する。ただし、語幹動詞が行為の場合であっても、多くは使役をスキップする形で受



益へ移行する。

表 4

	状態/自発⇒ 活動/行為	活動/行為⇒ 使役	行為⇒ 受益	行為⇒使役 ⇒受益
「する」	○	NA	NA	NA
「させる」	△ <sup>*1</sup>	○	NA	NA
「してもらう」	NA	NA	○	△ <sup>*2</sup>

\*1: 語彙化された使役動詞の場合。

\*2: 二重使役動詞の場合。

E. パラメータ 5 : 使役主語と使役補語の意味役割

表 5 : 使役主語

	原動主 (CAUSER)	行為主 (AGENT)	受益主 (BENEFACTIVE)
「する」	○ <sup>*1</sup>	○ <sup>*1</sup>	NA
「させる」	○	NA	NA
「してもらう」	○ <sup>*2</sup>	NA	○ <sup>*2</sup>

\*1: 原動主と行為主は同時に機能する。

\*2: 再帰分離的に原動主、受益主の順に役割を担う。

表 6 : 使役補語<sup>\*1</sup>

	行為主/原動主 <sup>*2</sup> (AGENT/CAUSER)	被態主 (PATIENT)	経験主 (EXPERIENCER)
「する」	NA	①	NA
「させる」	② <sup>*3</sup>	①	② <sup>*4</sup>
「してもらう」	②/IMPLICIT <sup>*5</sup>	① /IMPLICIT <sup>*5</sup>	NA

\*1: ①は一次的(primary)意味役割、②は二次的(secondary)意味役割。

\*2: 語幹動詞の意味タイプが発動的自発の場合。

\*3: 語幹動詞の意味タイプが行為の場合。

\*4: 語幹動詞の意味タイプが活動の場合。

\*5: 潜在的な使役補語の場合。

表 5 に見るように、原動主は 3 つのすべての型に共通して現れる。「する」型は、働きかけをするだけでなく自らも行為するという特徴を持つ。「してもらう」型は、通常の前動主から出発し、使役補語の行為の結果を受けて受益主で終わるという再帰

的なループを示す。

表 6 によると、「する」型には使役補語が直接目的語と一致するので、専ら被態主の役割しか演じない。「させる」型では、使役動詞の語幹の意味タイプに応じて、2つの異なる意味役割が付与される。「してもらう」型では、基底文の主語の有無によって、同じ意味役割が、顕在的使役補語、あるいは潜在的使役補語のどちらかに付与される。

F. パラメータ 6：使役補語の意味特性

表 7

	有生性 (Animacy)	発動性 (Instigativeness)	制御性 (Controllability)
「する」*1	-	-	-
「させる」	+/-*2	+	-
「してもらう」	+/-*3	+	+

\*1: 実質的には使役補語は存在しないので、NA と表記するのが妥当である。ただし、対格形/再帰所有形/欠如格形の直接目的語の意味特性と捉え、他の 2 つの型の使役補語と対比するために、あえて値を付すと、上記のようになる。

\*2: 自発タイプの自動詞で自らエネルギーを発動できる場合には無生([-animate])でもよい。

\*3: 使役補語が有生([+animate])であっても無生([-animate])であっても、自らエネルギーを発動できればよい。

G. パラメータ 7：使役主語の操作力(Force of Manipulation, FM)と使役補語の行為力(Force of Action, FA)の強さの度合い

図 1：操作力の度合い(Force of Manipulation, FA)

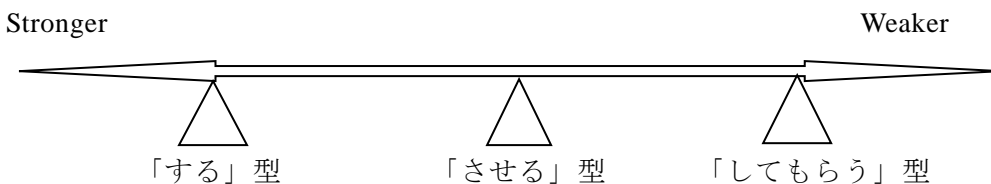


図 2：行為力の度合い(Force of Action, FA)

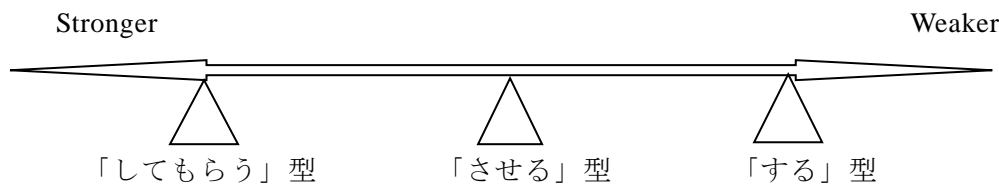


図 1 でわかるように、「する」型は使役主語が原動主であると同時に行為主でもあり、直接目的語への操作力は強く働く。反対に、「してもらう」型では、原動主とし

ての使役主語の使役補語への働きかけは暗示的にとどまるので弱くなる。

図 2 は図 1 とは正反対の様相を呈する。「してもらう」型では使役補語から使役主語への行為の行使は積極的であるのに対し、「する」型ではそもそも行使し得る使役補語がなく自ら行為する力を持たない直接目的語があるだけなのだから、行為力はゼロということになる。

「する」型と「してもらう」型に較べて「させる」型は、操作力、行為力とも、尺度の中央のプロトタイプ的位置にあり、均衡を保っている。

以上、A~G の 7 つのパラメータのうち、A と B の 2 つが形態・統語的なパラメータ、C~G の 5 つが意味・機能的なパラメータである。モンゴル語の使役文の 3 つの意味は、この 7 つのパラメータが相互に作用し合って生み出されていると考えられる。

パラメータから見て取れることは、「させる」型が他の 2 つ、すなわち「する」型と「してもらう」型と較べて、最も中庸な位置を占めているように見える点である。

(5-3) 「させる」型のパラメータの内容：

- A. 語幹：自動詞、他動詞
- B. 使役主語の格形：主格形  
使役補語の格形：対格形/再帰所有形/欠如格形、与格形、具格形
- C. 語幹動詞の意味タイプ：行為、活動、発動的自発
- D. 使役動詞の意味タイプ：使役
- E. 使役主語の意味役割：原動主  
使役補語の意味役割：被態主▶行為主/経験主
- F. 使役主語の操作力：中程度  
使役補語の行為力：中程度
- G. 使役補語の意味特性：[+animate, +instigating, -controllable]

(5-3)は、なぜ「させる」型の意味を表す使役文がプロトタイプであるのかの理由を明確に示している。同時に、使役動詞を有しながら、「する」型と「してもらう」型が、プロトタイプから離れている様子を明示的に捉えることができるのである。

謝辞

\* 本稿を完成させるのに際し、貴重なコメントをしてくださった二名の査読者に心からお礼を申し上げる。もちろん、内容、誤記等の責任は、すべて筆者一人に帰すものである。

注

#1 右肩の数字は、形態音韻規則の一つ、母音調和(vowel harmony)に従って交替する異形態の数を示す。各接尾辞の異形態は、次の通りである。

(i)-aa<sup>4</sup>-: -aa-/-ee-/-oo-/-öö-

(ii)-ga<sup>4</sup>:- -ga-/-ge-/-go-/-gö-

(iii)-lga<sup>4</sup>:- -lga-/-lge-/-lgo-/-lgö-

(iv)-uul<sup>2</sup>:- -uul-/-üül-

#2 グロス等で用いられている省略記号の対応は、次の通りである。

ACC: Accusative, ATTR: Attributive, C: Complement, CAUS: Causative, CMP: Completive, COOP: Cooperative, CST: Causative[suffixes], DAT: Dative, DO: Direct Object, DSR: Desirative, DRC: Directive, EP: Epenthetic Consonant/Vowel, GEN: Genitive, HBT: Habitual, ICC: Imperfective Converbial, IMP: Imperative, INS: Instrumental, INTRAN: Intransitive, IO: Indirect Object, LOC: Locative, NOM: Nominative, NPS: Nonpast, OPT: Optative, PC: Privative Case, PCC: Perfective Converbial, PF: Perfective, PL: Plural, PP: Post Position, PPST: Perfective Past, PRS: Present, PST: Past, Q: Question Marker, REF: Reflexive-Possessive, RPST: Recent Past, S: Subject, TRAN: Transitive, V: Verb, 1SG: First Person Singular, 1PL: First Person Plural, 2SG: Second Person Singular, 3SG: Third Person Singular, 3PL: Third Person Plural, 1PCL: First Person Singular Possessive Particle, 1PLPCL: First Person Plural Possessive Particle, 3PCL: Third Person Singular Possessive Particle.

#3 文データの出典は、< >で示す。省略記号の対応は、次の通りである。

AD: Attested Data, L: Luvsanzhav (1976), M: Kullmann and Tserenpil (1996), MX5: Bjaman (1979), ÖS: Ödriyn Sonin [Newspaper], U: Šarav (1978).

#4 ( )内は筆者による補筆である。

#5 対格形、再帰所有形、欠如格形は指示性に依存する交替形であり、原則として、共起することはない。

(i)[+specific]: 対格形か再帰所有形で実現する。まれにこの順で共起することがある。

(ii)[-specific]: 欠如格形で実現する。

ただし、文法役割を異にする場合には、共起できる場合がある。たとえば、対格形が副詞節の主語で、欠如格形が直接目的語の場合である。

#6 モンゴル語の格接尾辞-d/-t は、与格形と位格形の両方を表示するので、しばしば「与位格形 (Dative-Locative)」と呼称される。本稿では、その表す意味に応じて、与格形(Dative)と位格形(Locative)を分けて扱う。「道具格」は、本稿の具格形に対応する。

#7 ただし、梅谷 (2006)では、受身形接尾辞と使役形接尾辞の連続性を、文構造と意味から詳細に記述・説明している。

#8 使役文に関与する主な意味役割は、次の通りである。

(i)行為主(AGENT, AGT): 行為を遂行するもの。

(ii)原動主(CAUSER): 自らエネルギーを発動し、行為や事態を引き起こすもの。

(iii)経験主(EXPERIENCER, EXP): 知覚や思考などの認知活動を経験するもの。

(iv)被態主(PATIENT, PAT): 行為、作用、活動などの影響を被るもの。

(v)受益主(BENEFACTIVE, BEN): 利益や恩恵を被るもの。

(vi)受領主(RECIPIENT, REC): 行為、作用、移動などを受け取るもの。

(vii)話題主(THEME, TH): トピックとなるもの。

#9 この分類は、モンゴル語の動詞に基づいて著者自身の着想で作成した。

- #10 辞書などに記載される場合、動詞は一般に、-x で終止する非過去形で表記される。
- #11 自発動詞は概ね、Perlmutter (1978)、影山 (1993)、Levin and Rappaport (1995)、Delbecque (2002)で論じられている「非対格動詞(unaccusative verbs)」中の、「被行為」及び「五感に作用する非意図的現象」と合致する。ただし、これは理論言語学(生成文法、関係文法等)で提案された、統語的側面からの自動詞の分類であり、「非能格動詞(unergative verbs)」と対置させることで、ある種の統語現象について一定の説明力を発揮する。それに対して、本稿ではあくまで意味的側面からの分類であり、自動詞だけではなく他動詞も入って、他の 3 つの意味タイプと相互に比較されることで、使役文の異なる意味の説明に有意に関与するのである。
- #12 意味特性(semantic features)は意味役割の構成要素である(Næss 2007, Luraghi 2014)。たとえば、Næss(2007: 86-114)は、他動性とそれに関わる参加者(participants)すべてを、「意志性(Volitionality)」、「発動性(Instigativeness)」、「受影性(Affectedness)」の 3 つの特性から捉えようとする。
- (i)Agent: [+VOL, +INS, -AFF]; Patient: [+VOL, -INS, +AFF]; Experiencer: [+VOL, -INS, +/-AFF], etc.  
Luraghi(2014: 111)は、「人間性(Humaness)」、「制御性(Controllability)」、「状態変化(Change of State)」、「意志性(Volitionality)」の 4 つの特性を用いる。
- (ii)Agent: [+HUM, +CONT, -COS, +VOL]; Patient: [-HUM, -CONT, +COS, -VOL]; Experiencer: [+HUM, +/-CONT, +/-COS, +/-VOL], etc.
- (i)と(ii)に見るように、意味特性の設定と値は、研究者間で異なる。本稿では、専ら、使役主語と使役補語の意味役割に焦点を当てて、比較的広く受け入れられている、次の 3 つの意味特性を導入する。
- (iii) a. 有生性(Animacy): [+/-Animate]  
b. 発動性(Instigativeness): [+/-Instigating]  
c. 制御可能性(Controllability): [+/-Controllable]
- なお、受影性(Affectedness)については、他動詞文においても使役文においても、目的語補語や使役補語に当然適用され、有意な弁別機能を持たないので、採用しない。
- #13 (2-12a, b, c)は文意を補うために、(2-11a, b, c)に含まれていない語を加えている。
- #14 「させる」型使役文については、第 3 節で考察する。
- #15 使役補語の意味役割は一般に PAT▶AGT であるため、操作力の働きかけを受けて初めて使役主語の制御下で自ら行為を発動できるのであるから、発動性の値はプラス、制御性の値はマイナスとして設定される。
- #16 xögžix と xööröx には-uul<sup>2</sup>-の他に-aa<sup>4</sup>-や-ga<sup>4</sup>-の付いた形もある: xögž-öö-x, xöör-gö-x。これらの使役動詞が、xögž-üül-e-x や xöör-üül-e-x と意味、用法にどのような相違があるのかについては、現時点ではわからない。
- #17 対格形接尾辞 ijg は、所有接語の前で g を省くことができる。e.g. baj-sn-ijg n' ⇒ baj-sn-ij n'。
- #18 基底文に与格形目的語補語がある場合、使役化の過程で削除される。残る事例に関しては、第 3.2.3.3 節で触れる。
- #19 査読者より「対格等の使役補語を持つ使役文、与格形の使役補語を持つ使役文、具格形の使役補語を持つ使役文の 3 つの間で、使役主語の操作力や使役補語の行為力に違いは見られないのか」という重要な質問があった。橋本(2015)では、格形が担い得る意味役割として、対格形は THEME

([+affected]THEME =PATIENT)を、与格形は GOAL ([+volitional, -affected]GOAL = RECIPIENT, [+volitional, +affected]GOAL = BENEFICIARY(本稿では、BENEFACTORY)),具格形は INSTRUMENT を、それぞれ典型的なものとして挙げている。これを基にすれば、たとえば、使役主語から使役補語へ及ぶ操作力は、与格形⇒対格形⇒具格形の順で強くなると推定できる。なぜなら、与格形は操作力を受け取ってから二次的な行為に向かうという間接性を示すのに対して、対格形は直接的な影響性を被るが二次的な行為に入る際にある程度の主体性を発揮でき、他方、具格形は完全に使役主語の掌中に捕捉されているからである。しかしながら、この推定の妥当性を証明する使役文に関わる具体的なデータは、乏しいと言わざるを得ない。今後の研究に期待したい。

#20 「させる」型で提示された使役<行為の序列とどう関わってくるのか、現時点では詳らかでない。使役/受益<行為のように、使役と受益を同じ階層位置に併記するか、受益<使役<行為のように、受益を使役より左に配置し、何らかの要因で使役をスキップさせるかが考えられる。なお、(4-27D)で言及した非顕在的使役接尾辞による説明は、仮説とはいえ、一つの解決案である。

#21 活動タイプに属すると思われる例がある。

(i) **Bi xičeel-ijn daraa emneleg-t oč-i-ž emč-i-d bij-ee**  
 1SG:NOM lesson-GEN after hospital-LOC go-EP-ICC doctor-EP-DAT body-REF  
**üz-üül-lee.**  
 see-CST-RPST

(私は放課後、病院に行って、医者に診てもらいました。) <AD>

üzex「見る」は知覚動詞で、一見、活動タイプに属するよう見える。ところが、この動詞には「点検する、学習する」等の行為の意味が存在するのである。

(ii) **Bi övčtön-ijg üz-sen.**  
 1SG-NOM patient-ACC take care of-PF

(私は患者を看病しました。) <AD>

(iii) **Bi angli xel üz-e-ž baj-na.**  
 1SG:NOM English language:PC learn-EP-ICC be-PRS

(私は英語を学習しています。) <AD>

したがって、(i)の使役動詞語幹となる üzex は「診察する」という意味の行為タイプであると考えられる。

#22 査読者より「(4-14a, b)は他動詞を使役化したものであり、使役主語と同一指示の直接目的語が意味役割として含意されるので、(4-16b)の図式に[DO:IMPLICIT=CAUS-S:PAT]を加えるべき」との意見をいただいた。確かに、(4-9a)と同様に、(4-14a, b)共に直接目的語として使役主語自身(の身体)を非顕在的な再帰的直接目的語として想定することは可能である。ただし、この再帰的直接目的語は使役主語に含意されているのであるから、改めて意味役割として顕在化させる必要はないと考える。貴重なご指摘をしていただいたこと、感謝申し上げたい。

#23 (4-18b)の nomijg min'が(4-18a)で再帰所有形の nom-oo となるのは、1人称所有接語が基底文の主語の束縛から自由であるのに対し、新たに導入された1人称代名詞が使役主語として再帰所有接尾辞を束縛できるようになったためである。

- #24 原文では使役主語は非顕在的であったが、説明を明確にするため、不特定指示の xümüüs 「人々」を補った。
- #25 査読者より「自発/状態の語幹に二つの使役接尾辞が付いて、《行為/活動》使役と2段階移行するような例」が存在するかどうか問われたが、そのような例は見当たらない。二重使役動詞の意味タイプの階層は(4-26)に記したもののだけにとどまる。貴重なご指摘をいただいたことに感謝したい。

#### 参考文献

- Baatarsukh, Khatantuul. (2009) *Mongolian Grammar: Textbook*. USA: Munkhbayar Batmunkh.
- Bjambasan, P. (ed.) (1979) *Mongol Xel 5 Angi*. Ulaanbaatar: BNMAU Ardijn Bolovsrolijn Yaamnij Xevlel.
- Comrie, Bernard. (1976) "The Syntax of Causative Constructions: Cross-Language Similarities and Divergences," in Shibatani, Masayoshi (ed.), *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*, 261-312. San Diego: Academic Press.
- Delbecque, Nicole. (2002) "A Construction Grammar Approach to Transitivity in Spanish," in Davidse, Kristin and Béatrice Lamiroy (eds.), *The Nominative & Accusative and their Counterparts*, 80-130. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hammar, Lucia B. (1983) *Syntactic and Pragmatic Options in Mongolian: A Study of 'BOL' and 'N'*. Bloomington: Indiana University.
- 橋本邦彦. (2003) 「モンゴル語の受動文の意味と機能」 日本モンゴル学会紀要、第33号、15-27.
- 橋本邦彦. (2015) 「モンゴル語の補語の意味論 - 格と述語との意味役割の一致について -」 北海道言語文化研究、第13号、49-102.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 影山太郎. (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- Kullmann, Rita, and D. Tserenpil. (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenco Ltd.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.2, Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Massachusetts: The MIT Press.
- Luraghi, Silvia. (2014) "Plotting Diachronic Semantic Maps: The Role of Metaphors," in Luraghi, Silvia, and Heiko Narrog (eds.), *Perspectives on Semantic Roles*, 99-150. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Luvsanzav, Čoy. (1976) *Mongol Xel Bičig*. Ulaanbaatar: BNMAU Sajd Narijn Zövlölijin Ulsijn Deed, Tugaj Dund, Texnik Mergežilijn Bolovsrolijn Xoroonij Xevlel.
- Næss, Ashild. (2007) *Prototypical Transitivity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Perlmutter, D. M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, 157-189. Berkeley Linguistics Society, University of California, Berkeley.
- Rice, Keren. (2000) "Voice and Valency in the Athapaskan Family," in Dixon, R. M. W., and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.), *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*, 173-235. Cambridge: Cambridge University

Press.

Šarav, C. et al. (eds.) (1978) *Unšix Bičig*. Ulaanbaatar: Ardijn Bolovsrolijn Yaamanij Xevlel.

塩谷茂樹. (2007) 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』 大阪外国語大学.

Talmy, Leonard. (2000) *Toward a Cognitive Semantics: Volume I: Concept Structuring Systems & Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Massachusetts: The MIT Press.

梅谷博之. (2006) 「モンゴル語における受身接尾辞と使役接尾辞の連続」 in 加藤重弘・吉田浩美 (編)、『言語研究の射程 - 湯川恭敏先生記念論集 - 』、83-102. ひつじ書房.

山越康裕. (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』 白水社.

執筆者紹介

氏名：橋本邦彦

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域

Email：92hashimot@gmail.com